

# 第1回人文知応援大会

コロナという厄災に立ち向かう人文知

(文字起こし原稿)



人文知応援フォーラム

## 目次

開会の挨拶.....	2
大原謙一郎（人文知応援フォーラム共同代表・大原美術館名誉館長） .....	2
平川南（人間文化研究機構長） .....	3
基調講演 .....	3
司会 高階秀爾（東京大学名誉教授・日本芸術院会員） .....	3
「ポピュリズムとコロナ禍の社会の中で」 佐々木毅（日本学士院会員） .....	4
第1部 コロナ危機克服の諸課題を人文知が読み解く .....	13
コーディネーター 榎原定征（日本経済団体連合会名誉会長） .....	13
意見表明1「コロナ危機と国際政治～リベラルデモクラシーは普遍的価値たり得るか～」 五百旗頭真（公立大学法人兵庫県立大学理事長） .....	14
意見表明2「科学技術にとって人文知とはなにか」 福岡 伸一（生物学者・青山学院大 学教授・米国ロックフェラー大学客員研究者） .....	23
第2部 人間文化研究の現場から .....	34
コーディネーター 長谷山彰（慶應義塾長） .....	34
「人文知でパンデミックに対峙する」 磯田道史（人間文化研究機構国際日本文化研究セ ンター准教授） .....	34
「自然界と想像界のあわいに漂うもの」 山中由里子（人間文化研究機構国立民族学博物 館教授） .....	40
閉会の挨拶.....	49
挨拶 近藤誠一（人文知応援大会実行委員長・人文知応援フォーラム共同代表・元文化庁 長官） .....	49
「大会宣言」採択 .....	51

この原稿は第1回人文知応援大会の記録を目的として事務局によって音源を元に文字起こしを行ったものです。音声聞き取れず文章のつながらなかった箇所は「・・・」と表示しています。文字起こし今後の参考とするために便宜上作成したものであり、必ずしも正確でない箇所もあることをご了承のうえ、ご覧ください。

## 開会の挨拶

大原謙一郎（人文知応援フォーラム共同代表・大原美術館名誉館長）

ただ今ご紹介いただきました大原でございます。私の目の前にはマイクとカメラしかありませんので、先ほどのお話の通り、マスクははずしてお話させていただきます。人文知応援フォーラムと、それから人間文化研究機構、両方の共同主催で今日のこの大会を開くことができることになりました。プレスの皆さんも含めまして、皆様ウェブの彼方でご参加いただいております。本当にありがとうございます。なるべく中身の濃い大会にするように私たち頑張ったいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

人文知応援フォーラムというフォーラム自身、まだあまりお耳に馴染みのない名前かと思えます。私たちは日本の国で人文知がもっともっと働いてほしい、もっと人文知が働きやすい国になってほしい、そういう思いで集まった仲間たちの集合体です。今歴史が大きく変わっている、これはコロナだけで変わったわけではなくて、コロナの前からいろいろと変わってきていたんですけれども、これにコロナが拍車をかけたという状態かと思えます。そういう中で私たち一人ひとりの生活も日本の国の在り方も世界の在り方もいろいろと変わっていく。新しい何かをこれから作っていかねばならない、そういうふうに新しいものを作っていく時に、力になるものこそが人文知だと私たちは考えています。

人文知とは何だ、定義してごらんと言われたらかなり困ってしまうのですけれども、いくつもいくつもの定義があります。ただ人文知は確実に私たちの歴史の中で今までも働いてきましたし、これからも働いていこう。今から70年以上前ですけれども、第二次世界大戦に私たちの国は敗れました。瓦礫の中から立ち上がろうとしている大人たちの姿を、当時私は子どもだったですけれども、見ておりました。国を導いている大人たちがどんなに強い心をもっていたか、子ども心に非常に強く印象に残っております。そしてそういう強い心の背後にあったものこそがたぶん人文知だったんだろう。日本だけではございませんで、その頃日本に勝った国であったアメリカにおいても、世界のいろんな多様な人文知を尊重しようという気風がかなり強かったように伺っております。日本の国の今の姿を作り上げるために、戦後瓦礫の中で日本を助けてくれたアメリカのリーダーたちの中でも、しっかりと何かそういう人文知が働いていた。だからこそ今の日本がある。その後も私たちは非常に多くの苦難に直面していきました。

企業の在り方も生活の在り方もガラリと変えてしまうような、いわゆる石油ショックとか、いろんなことを経験しましたがけれども、それからどうやって立ち直ってきたかということを考える時には、やはりそこに人文知が働いていた。私たちは、人文知応援フォーラムは、この大会を契機に、一つ組織的にも成熟した形にしてこれからも頑張ったいと思います。今日のこのフォーラムで人文知というものがどのように働いてきたのか、これからどのように働いていくのかも含めて、いろいろと新しい知見を得まして、これからもさらに頑張ったいと思っております。どうぞ人文知を、人文知応援フォーラムも、そして

人間文化研究機構をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

平川南（人間文化研究機構長）

皆さま、こんにちは。人間文化研究機構の機構長を務めております平川南です。本機構は6つの機関から構成されております。東の方では国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、関西の方にまゐりますと、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、そして国立民族学博物館の6つの機関でこの人間文化研究機構という組織を構成しています。この組織運営に関しまして、外からの意見をできるだけ広く取り入れてという趣旨から、外部委員が過半数を占める経営協議会を設置しております。2018年のこの会議におきまして、私の方から現在の大学等の人文学がおかれている厳しい研究環境ということを申し上げました。その時に複数の外部委員の方から、研究者コミュニティだけでなく、社会の幅広い分野の人たちも同様の危機感をもっておられるという発言をいただきました。その発言者のお一人がただ今ご挨拶されました大原さんです。

現在コロナ禍の中で、社会の様々なひずみが顕在化しております。こうした問題を根源的に解決する鍵は人間文化にあると思います。人間文化を探求する学問は、人間、文化、社会、そして自然をその研究対象としています。人文学は人間とその文化を総合的に探究する学術研究です。私たちはこの文と理を超越した人文知が広く社会に広まることによって、人文学もまた発展することができると思います。今回の人文知応援フォーラムから私たちは応援をいただくわけですが、日本列島各地の人文知にかかわる研究機関、研究者と共に、さらに社会全般にフォーラムが広まることによって、共に活動し、私たちは文化に満ちた和やかな社会を一緒に築いていきたいと思っております。ぜひ今後ともよろしくお願いいたします。

## 基調講演

司会 高階秀爾（東京大学名誉教授・日本芸術院会員）

高階秀爾でございます。ただ今ご紹介いただきましたように、本日の基調講演の司会を務めさせていただきます。基調講演をお願いするのはご案内の通り、佐々木毅さんですが、佐々木さんは実は秋田県仙北郡の千屋村のご出身で、私も代々千屋村、同郷なんですね。千屋村は今は町村合併で美郷町になりました。その歴史民俗資料館佐々木毅研究室というのがちゃんと復元されておまして、私も拝見してまいりました。佐々木さんはそういう、秋田から出てきて、もちろん政治学、政治史、大変大きなお仕事をされて、東大その他でも教えられ、東大総長も務められました。同時に、人文知というか人間研究についても大変研究を進めておられました。

佐々木さんが翻訳されたマキャベリの君主論、これイタリアの、正にルネサンス時代の政治的に大変活躍した人ですが、の書いた本、君主はどうあるべきかということです。佐々木さんがその翻訳と、それに大変詳細な注をつけて、こういう事情の中でマキャベリという人

は、マキャベリはなんとなく単なる権謀術策の人間と思われていますが、大変人間についての洞察が深いことを佐々木さんのご翻訳の本で教えられました。さらに佐々木さんは大変重要なご本として、プラトンの呪縛 20 世紀の哲学と政治という、これはもちろん政治学の本ですが、だけではなくて、哲学と政治、それもギリシャ、プラトン以来の哲学の思想の流れをたどりながら。実は 20 世紀の一番暗いナチスの時代の政治の背後にあったもの、支えたもの、それをずっと分析されました。そこにある人間の、例えば、ナチスの思想に対する反発としての…、あるいはハンナ・アーレント、私も大変興味あります、の思想を分析して、それが政治にどう反映していくか、哲学の方が元なんです。

このプラトンの呪縛というのは、大変優れた人文知の人間研究の名著だと思います。実際にもこれは和辻哲郎文化賞、大変大きな賞をおもりにになりました。ですから佐々木さんはそういう意味で大変優れた人間知の研究者でもあり、同時に優れた組織、大学やなんかでも活躍されております。従って今日は、この人文知のために講演をお願いすることにいたしました。テーマは「ポピュリズムとコロナ禍の社会の中で」ということになっておりまして、どういってお話になるか、私も大変心待ちにしているところです。佐々木さんは一橋講堂から皆様にお話することになると思います。基調講演、佐々木さん、よろしく申し上げます。

「ポピュリズムとコロナ禍の社会の中で」 佐々木毅（日本学士院会員）

佐々木でございます。高階先生、どうも過分のご紹介ありがとうございました。今日は基調講演ということでものすごく緊張しておりまして、何分にもコロナ禍はまだ先が見えたわけではなく、我々もまだその渦中にいるわけでございまして、そこでどういうことが言えるのかということは、大変難しいところです。そこでまず、はじめに、コロナ禍を見る視点についてという、ちょっと一般的なテーマから入らせていただきたいと思います。

まずコロナ禍を見ながら、自分として考えた、思っていた点は、死ぬということについてです。死というものについて考えざるをえない一つの場面に我々は直面しております。そしてこういう、パンデミックの中で死ぬということはどういうことなのか、ある人はこういうことを言っておりました。予見可能な中で、ゆっくりと様々な手当を受けながらゆっくりと死に至るといふことは、人間として容認できるのですが、死者が巷にあふれ、いつ自分もそうでなくなるかわからないというのは、人間として耐え難いことであるというような文章を書いているのを目にいたしました。なるほどなと思ったわけではありますが、もう一つ、それと合わせて私自身が拙いながらも考えたことですが、こういうパンデミックになりますと、ある意味で人間が人間にとって非常に危険な存在になるということです。これは人間として、きわめて耐え難い状態におかれるということでもあります。もちろん病の苦しみもさることながら、人間が人間にとって、自分が他の人間にとって危険な存在であるということは、誠に重いテーマを我々に突き付けているように見受けられます。そして、人間にとって危険な人間というのは、もちろん隔離されるべきものであるということです。他の人間との接触は一切認められず、そして計り知れない孤独の中で死に至るといふことの持つ重

みというものは、それこそ人文知の歴史の中でも一番重いテーマの一つではないか。どのような新しい人文知が今度のパンデミックを契機として生まれるのか、注目してみたいものだった次第であります。

2つ目は歴史的な環境であります。今度のコロナ禍はある意味で非常に具合の悪い時に起こった、あるいは具合が悪かったから起こったか、ここはわからないのですが、端的に申し上げれば、これまで世界の政治経済秩序の骨格を担ってきた国々における政治体制の動揺、あるいはコンフリクト、あるいは混乱というものが、この数年、目を覆い難い状態になってきている中で起こったということです。いわゆるポピュリズムと言われるものも、その代表的な例でございますが、その意味で問題解決能力というものについて、信頼を持ってないような政治社会状況のもとでこの大きな問題が起こった。そういう意味では誠にタイミングが悪いというのか、あるいはそういう状況であったから、こういうタイミングの悪い出来事がおこったのか、それはいろいろ議論ができるかと思えますけれども。その意味では、後でまた五百箇頭先生からもお話があるようでございますが、その及ぼす影響というものについて、慎重に考慮しなければいけない状態に我々はいるわけです。

3点目、こういうパンデミックというのは、先ほど大原さんのお話にもございましたが、今や起ころうとしていることを加速するような効果を多くの場合持つのではないかと。もちろん好ましい方向での変化を加速する場合がありますし、好ましからざる変化を加速する場合があります。そういう意味ではある種残酷な促進剤のような役割を果たすことがあるのではないかと、必ずそうだというわけではないという意見もおありかと思えますけど。その促進剤の側面を見ておく必要があるのではないかと。以上3点が、私が最初にはじめに申し述べたかった点です。

それでは次にまいります。1として、新型コロナウイルスとの戦い。これはもう皆さんご存じのことを繰り返すまででございますが、我々なお今日の前で見ているわけでございます。まず一つ、このようなウイルスとの戦いにおいて特徴的なのは、人間の自由というものと政治や政府の役割が直に接触する、接触せざるを得ない局面があるということでございます。普段であれば私的なこと、あるいは人間の自由というものとして尊重されている領域に踏み込んだ形で様々な規制や拘束やあるいは監視や介入をしなければいけない立場に追い込まれる、あるいは追い込まれざるを得ない。但しどういう風に、どこまで、何をするか、という線引きは非常に微妙であり、かつ幅もいろいろあるわけです。いずれにしてもその自由との接触、あるいはぎりぎりの対面、関わり合いという問題がまず最初に目につく点であります。その意味では、いろんな政策問題とは少し様相を異にすること、そしてその際に、人間の自由をどう扱うかということについての、文化的、精神的前提というもの、あるいはその基礎的背景というものが問われることになるわけでありまして、見ていまして、非常に特徴的な傾向が見られるわけでありまして。一般的に申し上げまして、人間の自由に政治権力が介入するというを当然としているような体制のもとにあつては、それなりの対応が取られるわけでありまして、そうでないところでは、やはり違った対応を取らざるを得ない

い立場にあると自分たちで認識をするということでもあります。

マクロとマイクロというものをそこでちょっと挙げましたが、マクロというのは、戦いの手段を非常に概括的な手段に重点をおいて進める。例えばそこにもありますようにロックダウンみたいな形で人の移動に大きな網をかけるようなやり方でありまして、マイクロというのは、誰がコロナウイルスを持っているかということについての、個別具体的な情報に基づいていろいろな規制や監視やその他の方策を動員するのがマイクロであります。マイクロというのはそういう意味で使ったのですが、政治学的に言いますと、人間の自由を束縛するのは、抽象的な権力行使ではなくて、やはり具体的な権力行使の場面においてでありますので、マイクロになりますと、自由との接触面というものは非常にシビアになり、かつ微妙になり、かつ限界を超えるという問題が出てくる可能性があるわけです。総じていわゆる先進国はマクロ的な方策に力点を置いて、その結果として結構たくさんの感染者とたくさんの死者を出しているようにも見受けられるわけです。これに対して、アジアの我々の近隣諸国におきましては、極めて綿密なマイクロ的な対策、あるいは工夫によりまして、そういう意味での人的なダメージを抑えることに成功しつつあるように見受けられるわけでありまして、まだ終わったわけではありませんから、これからどうなるかわかりませんが、そういういろいろなバラエティがあるということでありまして。

日本は二言目には出てくるのは自粛という言葉でして、自粛というものは確かに一つの有効な人間の行為をコントロールする手段であります。みんな自粛していただければ誰も文句言う人がいないということになるという意味では、大変効果的な、社会的なパフォーマンスの世界だろうと思います。これもまさにさかのぼっていけばいろんな人文知の問題がそこに隠れていそうなテーマであります。マクロ的な政策をとりますと、特に経済活動の中断という大きな問題、ほとんどの人が自宅待機みたいなことになるということでありまして、その結果として経済に大きなダメージが起こることになります。それを防ごうとすると、テレワークを始めとして、いわゆるデジタル化を強制的に進めるといって、まさに先ほどはじめに申し上げましたように、加速度がついてくるわけでありまして、働き方の実態が大きく変わっていくということが一例として起こったのは、我々の見るところであります。そしてまたそれをさらに補うために、何分にも経済活動の自由を大幅に制限するということの保障として、大胆な金融・財政政策を打たないと到底社会がもたないということになりますから、そういう政策がそろって、これは先進国が横並びで進めてきたところでありまして。

そういう形で経済を支えるための猛烈な資源の投入が世界中で行われたわけでありまして、もちろんそれが可能な国、可能でない国、あるいは程度、対象はいろいろあるかと思いますが、しかしながらいづれにしても、経済が大きなダメージを受けたということは否めないところでありまして。そこでその経済的なダメージのコントロールとそれから感染症のコントロールとの間のトレードオフをどうするかというようなことも常に議論をされてきたところですので。そして見ていますと、どこでも医療資源が大変に不足して困ったという話が、

マスクから始まって、ワクチンに至っても今進行中でありますけれども。要するに誰も予想して準備をしていたというわけでないということであり、そして気がついてみたらマスクもないし、そしてもちろんワクチンを新しく作らなければいけないということですから、致し方ございませんけれども、マスクに限らず、いろいろな医療資源の不足をめぐって非常にシビアな状況が、少なくとも去年の春から夏にかけて各地で続いたことはご案内の通りであります。

このような戦いの中で、どのような結果ないし帰結とでもいうべきものが見られたかということについて、そこで2に移らせていただきますが、経済は文字通り職場がなくなりまして、大量の失業者が出ている、まあ正確な数字はわかりませんが、特にどこにおきましても、若者の失業率が非常に高くなっている、あるいは業種によって、業態によって大きな違いがあるということはお案内の通りであります。そして財政赤字は先ほど言ったようなことで、大変膨らんでおりまして。ある意味で働かないで食べさせてあげるということも事実上行われた国もあるわけでありまして、その意味では財政負担というものがいったいこの後どういう帰結を招くのかは、まだ見通しが立たないままで、みんな日本の財政赤字を心配していましたけれども、だんだん追いついてきた国もあるし、他の国の財政状態もなかなか厳しいものがあることはご案内の通りであります。

それと同時にもう一つ必ず出てくる問題は、格差の拡大という問題が大きな話題でございます。この頃新聞を見ますと、K という文字が出ておりまして、アルファベットの K ですが、これは要するに一方の線は上向き、一方の線は下向きになっておりまして、要するに格差が広がるという事情を象徴しているわけでございます。国によっていろいろ、事情は同じではありませんけれども、例えば特に派手に議論されているのはアメリカであります。これは世代間のいわば格差でもあるということでありまして、そしてその格差の縮減というものを目指して大統領選挙の一部の候補者が熱心にそれをアピールしようとしたことは、よく知られているところであります。その格差の問題について、すでにこのコロナウイルスのまん延が始まる前から、実は先進各国で問題になっていたテーマでありまして、ポピュリズムもある意味でその源の一つは、格差の拡大にあったわけでありまして。グローバリゼーションとデモクラシーという、このいわば世界共通の基本的な価値観というものがいかにうまく機能しているかということについて、今から10年あまり前からだんだんだんだん懐疑的な見方が増えてきてまして、どうもグローバリゼーションは、特に先進国の中流以下の層の所得というものにとっては、誠に酷な結果を生み出したのはでないかというような研究結果がいろんなところから出てまいりました。その辺からいわゆるそのブルーカラーの反乱が始まってくるわけでありました。

トランプ主義も含め、そこに一つの震源地があったことは明らかであります。そういうところへ今度コロナのまん延という問題が起こって、さらにそれに拍車をかけるというようなことになりました。そこでこの問題がこれからの問題として尾をひくであろうということとは容易に想像されるところであります。その点については後でまた少し触れるとして、



この格差の拡大の問題がいろんな意味での閉塞感の大きな原因ではありますが、同時に今度のコロナの拡大によって、いろんな生活スタイルの変化というものも見られるようになりました。例えば東京の人口が減りつつあると、まあこれはいろんな原因があって減ってるんですけども、しかし同時に外に出ていく人たちの数が入ってくる人たちよりも多くなってきて、その意味で日本と言えば東京圏への人口の集中というようなイメージがあったわけですけども、それは変わりつつあるのではないかという議論の手がかりにしようという、そういう意見も珍しくなくなってきて、地方自治体の中には積極的に東京圏から若い人を中心に地方へ住むことを勧める、そういう動きも活発化してきているようでありませ

す。そういう新しい動きもある一方で、他方ではいわゆるテレワークもいろんな意味での新しいストレスの原因となるということもあり、その結果として、学校も休んでいたこともあったと思いますけれども、非常にストレスが溜まって孤独になり、あるいは自殺の問題等が増加するようになってきた。特に女性の自殺者が増えているということは日本でも統計的に明らかなのでありますけれども、それやこれやで政府もこの孤独の問題を取り上げるといようなことをこの頃考えているようでありまして、これこそまさに人文知にとっても大いに期待されるころ大なテーマではないかと思うわけでありませ。あまり芳しい話題ではありませんが、このコロナの圧力というものは、いろんなところで、ちょっと今までかろうじてバランスをとっていたところをバランスを崩すような、そういう効果を持っている。いろんな好ましい明るいような話題につながるころもあるけれども、他方ではどんどんどんどん人間の意識というものにストレスがかかって、人間自体を苦しい状況に追い込むということも同時に進行しつつあるわけだ

です。それから、これは私自身が特に興味深いことでもありますけれども、この頃はアメリカのトランプ支持者ではありませんが、大変嘘の流行る世の中になりました。そういう意味では情報汚染というべきものも、特にこのパンデミックが起こるといような状況になりますと、いろんな噂話やあるいはいろんな危うい話みたいなものが伝播しやすいような心理的環境があるということなんでしょう。とにかくこの情報の汚染というもの、政府も一生懸命それを克服すべく発信を続けているわけでありませが、政府の方の装置もなかなかうまく機能しないものがあつたりして情報が混乱状態になっていくといことは、社会がそれ自体が混乱状態に近づいていくとい恐れも内包している、結構深刻な現実だろうと思

います。ポピュリズムが台頭してから以降、政治は心理というものとは無縁であるとい議論が結構流行してありませ、その意味では政治学者としては誠に仕事がしにくい世の中になったわけでありませが、それほどこの真実というものが全体的に薄れつつあつたころにコロナのまん延によって更に真実はその影が薄くなったといような感じがしないでもありません。といことはつまり、いろんな陰謀説やいろんな強力なメッセージを発するよな、いろんな組織や団体というものが登場してくる余地といものを我々は準備しているよな感じもしないではありません。情報汚染というものもやはり深刻化したものの一

ではなかったかという風に思います。

それからグローバリゼーションは実態としてはなくなることはないだろうという風に思います。ただし、マスクの問題にしても何にしても、単に安く手に入るというだけの話で万事を片付けるということに関して、ちょっと待てよというブレーキが少しかかりつつあるということは否めないところでありました。ですから反グローバリゼーションではありませんけど、デ・グローバリゼーションとでも言うべきものが心理的にいろんなところで起こりつつあるような感じがしております。これもまたその広がりによってはいろんな効果をもたらすことになるだろうと思います。

そこで4番目に移ります。パンデミックと政治体制の問題について少しお話させていただきます。のちほど五百箇頭先生からさらに国際的な観点も含めたお話があろうかと思いますが、私の方は若干のきっかけをお話させていただきます。ポピュリズムというのはよく言われるように、分断の政治と、いろいろな意味で分断を加速するようなメッセージを出して、それでもってエネルギーを補給するような政治のスタイルであるということが言われております。そして例えば彼らが言ってきたのは、国境の管理を強化すべきだというようなのを重要な施策に掲げてきました。アメリカはアメリカなりに、ヨーロッパはヨーロッパなりに事情があるわけですが、考えてみますと、コロナの広がりによって、どの国も水際の対策を厳格化する必要に迫られてきて、その意味ではコロナのまん延は彼らの主張をさらに強力なものにしたというような単純な話のようにも見えるわけでありまして、そしてさらにコロナは先ほど最初に申し上げましたように、人間と人間との単なるソーシャルディスタンスを超えた、ある種の人間に対する警戒心なり何なりを強制的にもたらしたという面がありますので、そういう意味ではこれまた分断効果がある現象だろうという風に思います。

さらにポピュリズムにおきましては、最近ちょっと暴力的かつ過激な現象も目立つようになってきました。分断からちょっと暴力化する傾向も一部に見られるようになっております。コロナとこのポピュリズムはなんでもかんでも重なるというわけでもありません。例えばマスクの問題について、ポピュリズム、例えば特にトランプ信者たちはマスクをつけることに非常に拒否的な反応を示している。そしてむしろ経済活動の自由というようなものを唱えたという面がありまして、その意味ではマスクをつけるようなコロナ対策に対して敵対的とも言えるような行動をとり続けてきていました。そういう意味ではコロナウイルス問題自体がいわばまた分断のテーマになったというような現象もありまして、その関係は簡単ではないのでありますが、少なくとも人間の間をいわばより協力的かつ包括、包摂的なものにしていくというような思考を拒否するという面では、重なり合う面がいくつもあったかと思っております。

もう一つ非常に大きいのは、これもポピュリズムがいったことなんですが、結局は政府がもっと積極的な、ただただ自由を追求し、自由を認めるというだけではなくて、政府の役割というものを積極的なものにしていくというのが、例えば国境の問題にしても何にし

でも、ポピュリズムが政府に要求した点であったわけでありませぬけれども。コロナ禍を契機にする中で、政府の役割というのは最初に申し上げた点も含めて否応なしに大きくならざるを得なくなったということも否めない事実です。過去 30 年あまりにわたって各国政府はできるだけその役割を小さくし、自由の幅を大きくするというのが政府の役割だというような傾向が強かったわけですが、コロナのまん延によって明らかに政府の役割の見直しが求められるようになりつつあるというのは否定できない事実であります。

様々なアジェンダがあるわけですが、その中で、先ほど申し上げました自由と監視のぎりぎりのせめぎあい政府がどのような役割を果たすかというのは最も重大なテーマでありまして、ここをやりすぎますと独裁的な権力構造を作り上げるのにコロナウイルス問題が利用されたということになる可能性があるわけでありまして、これはこれからも日々いろいろ我々もテストされる点だろうと思います。情報を集中し、政府が一手にそれを握る、特に個人の極めてプライベートな情報というものが握られるということは、身体的情報もさることながら、他のいろいろな情報もあるわけでありまして、身体的な情報から始まって、いろんなところにその影響が及んでいくというようなことになります。これは自由な体制にとりまして、深刻な事態を意味することになるわけでありまして、特に安全という問題は非常に人間にとって重要な価値でありまして、この安全というもののためなら何でもやってもいいんじゃないかというようなことになるのは一つの大きな危険な兆候ではないかと考えられるわけでありまして。

さらにコロナの問題はまだ終わったわけではありませぬし、これからも長期的に続くということになります。それからさらに国際的にも大きな広がりのあるテーマでありまして、途上国を含めてどういふことがこれからも起こるのか、我々には予測のつかないところがあるろうかなと思います。そしてそこに私はパンデミック対応実績通信簿というふうに書きましたが、パンデミックに対する各国政府の対応とその成果というものについて、どういふ評価が下され、それが国際的に、特にどういふ体制評価に結びつくのかということ、これはまだまだわからない点があるわけでありませぬが、いずれにしても私が非常に気になるのは、アメリカ合衆国が一番感染者が多く死者も多いということは、これは結構大きな意味を持っているのではないかと考えております。

そして自由な体制にとりまして、これから大事なことは、私はそこにちょっと書きましたが、パンデミック以前を超えてと書きました。パンデミックの前に戻るといふことばかり考えていると、おそらく戻れもしないし、そしてそこから新しい文化的、それこそ人文知に基づくような新しい知的なエネルギーもなかなか出てこないのではないだろうかと思います。あるいはパンデミック以前の世界はパンデミックがもう壊してしまった、それをもう一度作るというのは先ほどの財政的な事情を勘案しても、新たなリソースを振り向けてそれをやり遂げるといふことは果たしてそんなに魅力あるものなのかどうか、よくよく考えてみなければならない点だろうと思います。

そして大きな問題として根強く残るのは、広がるとされる格差の問題がずっと残り続け

るというわけでありまして、アメリカのこの前の民主党の大統領選挙では左派の中に格差の是正を求めるような動きがあったということが伝えられておりました。そのような流れが果たしてどの程度強くなるかわかりませんが、我々20世紀を過ごしてきた人間によると、格差が縮減したというのは確かに我々は体験したわけではありますが、それはまた極めて特異な歴史的条件下においてであったということも、改めて思い浮かべなければならないと思います。1940年代、50年代、60年代、70年代、確かに格差は縮小しました。その前に何があったかと言えば、二つの大きな戦争であります。それからもろもろの革命であります。そしてパンデミックも100年前にはなかったわけではありません。そういうことがあった時に、あるいはそれを一つのきっかけにして不平等が是正され、あるいは格差が縮小するということについてはいろいろ議論があるわけではありますが、さてこれからそういうことが起こるのだろうか、あるいはそういうことが起こるのが果たして考えられるのだろうか、というようなあたりについては、私らの世代にとってはもはや想像の世界でしかないのですが、いずれにしてもこの格差の問題は20世紀の初頭と現在とは極めて似通った構造をもっているということだけは確かでありまして、特にどのような新しい回答を見つけられるか、これからの若い世代の人文知の力の見せ所ではないかなということでもあります。

その意味で20世紀を生きた世代は、多くの問題を、環境問題を含め、多くの課題を後の世代に残念ながら解決して譲り渡すというところまではおそらくいかない可能性が高いのかもしれない。しかし、21世紀を生きる人々のために微力なりでも最後の努力をし、お役に立つべく、人文知の交流のため、あるいは人文知の強化のため、我々年配者もそれなりのできる協力をしなければいけないということを痛感しているこの頃でございます。最後になりましたが、基調講演というのは何を考えるべきなのか、ほとんど迷いまして、結局総花的な話になってしまいました。私の微力のいたすところではありますが、補助線みたいなものを少しでも引くことができたこととすれば幸いです。どうもありがとうございました。

高階： 佐々木さん、どうもありがとうございました。はっきりと様々な問題を、しかし大変わかりやすく、特にコロナとの関連でお話くださいました。ずいぶん私も教えられるところ、参考になるところがございました。特に我々、私も含めてですが、一般の方々にとって大変考える手がかりになった。まず最初に佐々木さん、このコロナというもの、つまりパンデミックで大きな問題を人間は突き付けられた、それは死の問題ですね。病気が治るとか治らないではなく、死に直面する。これは人間の歴史の中で、嫌でも死と直面する場面、これは生活が全く変わるわけです。大概の人間にとってどう生きるか、その死が目の前にある場合ですね、大変大きな問題になるということがまず最初に、佐々木さん、指摘されました。その通りだと思います。

そしてそれに対して、しかし我々はまだ死ぬ前に何をするか、いろいろパンデミックを防ぐとか、生活状況を変えるとあります。死は逃れられないものとして、それま

での我々の生活、生きるということをどう変えていくか、そのためにこのパンデミックというのはどう役立つか。つまり文化を進めていくための促進剤になりうるのではないかという、二つの問題が出されました。非常に大きな、しかし大変に明確でありながら考えさせられるところが多い話だったと思います。

そして具体的にそれではコロナに対してどうやるかということは、我々、これはご専門の政治の領域も含めて、これは我々確かに日常的に自由と拘束、あまり外に出てはいけないとか、GoTo トラベルやめろとか、しかし家の中でステイホームというのと、いやそんなことはやれない、自分は自分たちで好きなことをやりたいという、そこへの葛藤をどう解決するかという問題。それから格差が一方で拡大し、これはもうパンデミック以前からいろいろな問題になります。非常に少数の富裕層と大多数の貧しい人。それは特に国によって、例えば人種やその他ですね、階級でも差別が出てくる。パンデミックでさらにそれが医療体制を受けるとか受けないとかという問題で出てきて、そうなる一つの方策でそれぞれの国ができるか、つまり人間的な生活は脱グローバルゼーション、20世紀はグローバリズム万歳というような、経済においてもなんでもそうだったんです。いや、それぞれ地域なり、生き方、パンデミックに対する対応でも自由と拘束について、私の友人がフランスなんかでうっかり外にいるとポリスに怒られる。日本の場合には自粛できちんとそれが守られているというような生活感情ないしは伝統的な違いみたいなのが出てくるので、グローバリズムだけで対抗できるかどうかの問題。そしてそれに対して政府はいったいどういう風にするんだ。緊急事態宣言出すか出さないか。もっと早く出せというのと、いや、こんなことを出しては、という議論が分かれています。佐々木さんご指摘のように、政治の問題になってきて、人々の意見が出るようになる、分断ということが大きな問題になってきますよね。あるグループごとに分かれてしまう。それは階級であったり、人種であったり、あるいは年代であったり、国であったり。それは人間の生活にとって決して望ましいことではない。つまりグローバルゼーションというのは全部一緒になっているはずだと言っていたのが、分断がどう解決、政治の問題になってくると思います。それが同時に我々の生活の生き方の問題にもなるということで、この人文知の今回の基調講演、非常に明確な問題の指摘と将来への方向性ということをお話いただいて大変ありがたかったと思います。

私はそれを受けてじゃあどうするか、これも私自身の、それぞれ人々の問題ですが、役割として、政府あるいは人々の役割も含めてその中でどういう風にするか、我々はどう生きていくか、その一つの生き方として、もちろん様々な生活態度があるでしょうが、パンデミックの先例の中で私が思い出すのは、これは皆さんよく聞くのですが、中世末期の黒死病、ペストですね、ものすごいペストの流行の時に、逃げていく人もいたし、大変に悲惨な、イタリアの町なんか、死者累々なんです。それを逃れていった、結果として生まれてきたものは二つあります。一つがこれご承知のデカメロン。

逃げていった人たちが町から離れて日にちを過ごすうちに、・・・に話をしていた。これが文学の方においては、それまでの文学と全く違った現在の小説につながる文学、風俗小説につながるジャンル、中世まではなかったものを生み出した。現在では文学の小説、あるいはもっと広くいけば文学というものが大変我々の生活を豊かにしてくれています。その始まりはパンデミック、デカメロンなんですね。

もう一つが、あの時に芸術の方で、例えば画家や彫刻家はどうか。簡単に逃げ出すわけにいかないのが、町の中でいろいろ仕事をしている、宮殿を装飾したりする。それでは町の中でできないので、そこでパトロンも含めてですが、じゃあ離れても仕事ができるようなことというので、絵画、特に現在美術館でやってるタブロー画、移動可能な美術作品というのが生まれたんですね。これ以前、パンデミック以前は建築の装飾や大きな教会の祭壇画、これはもうとてもその場から動かさない。しかしパンデミック以降、逃げていく時にもって歩くとか、旅の間に持って行く、持ち運び。これは今では我々当たり前みたいに思っていますが、展覧会というのはそれで成り立つんです。芸術はそれのために、その中で生き延びていた。そういう方向、私は自分が美術のことをやっているもんですから、一つありうる。それはもう美術でなくてもいい。我々の生活を、知的あるいは感性的、あるいは情緒的生活を豊かにしていく方向というのも今後生きていく一つになりうる、というようなことも大変考えさせられました。私の勝手なことも含めてですが、非常に新しい問題提起と、それに対する、人間としてどう考え、そして対処していくかということをお教えいただきました。大変見事なご講演だったと思います。改めて佐々木さんにここで基調講演御礼申し上げます。私のご挨拶といたします。佐々木さん、どうもありがとうございました。

## 第1部 コロナ危機克服の諸課題を人文知が読み解く

コーディネーター 榊原定征（日本経済団体連合会名誉会長）

ただ今ご紹介いただきました榊原です。一言ご挨拶申し上げます。私は今回のご登壇の方々の中でただ一人経済界に身を置く者でございますが、長年経済界、特に企業経営に携わる者として痛切に感じていることは、この大会のテーマである人文知の重要性ということです。申すまでもないことですが、わが国経済の競争力の源泉、あるいは企業でいえば企業の活力の源泉はイノベーションでございます。イノベーションによって新しい技術や新しい製品、新しいビジネス、新しい仕組み、そういったものを開発する。それによって特定分野で世界 No 1、あるいは世界オンリーワン、そういった地位を築き上げることが重要であります。このイノベーションというのは企業あるいは国の技術開発力、研究開発力がベースになるものですが、その源、さらにそのベースに人文知によって磨かれた人間社会に対する深い見識、あるいは将来に対する鋭い洞察、あるいは先見性、こういったものを欠いては成し遂げることはできないわけです。アップルの創始者の一人であるスティー

ブ・ジョブズ氏、私も何度かお会いしたことがございますが、彼もイノベーションは広い教養、リベラルアーツ、そして専門科学技術、こういったものが融合したところから生まれるのだということを言っていました。そして人文知の重要性を指摘しております。私もわが国の企業経営に携わるすべての人が、今一度人文知の重要性と意義というものを見つめなおしていただきたい。イノベーションや社会課題の解決に向けて、高い感性や鋭い洞察力を磨き続けていくべきだということを強く主張したいと思っています。

折しも足元では新型コロナウイルス感染症の勢い、いまだ衰えを見せておりません。世界中の人々がかつてない厳しい試練に直面しております。このコロナ禍は人類に大きな困難をもたらすとともに、自国第一主義の台頭をはじめ、各地で様々な対立や分断をもたらす、そういった要因となっております。今後これを機に人々の価値観、生活様式、あるいは経済、社会の在り様が劇的に変化していく可能性があるわけです。このように人々の価値観や既存の制度、仕組みなどが揺らいでいる今だからこそ、人類の英知を結集した人文知への学びを通じて、この危機をどう乗り越えていくのか、また新たな未来社会をどう作り上げていくのか、今日は皆様とともに考えてまいりたいと思っております。

こういった観点からこの第1セッションでは、コロナ危機克服の諸課題を人文知が読み解くといったテーマを掲げております。そして講師の先生お二人をお招きしております。お一人は兵庫県立大学理事長の五百旗頭眞先生、もう一方は青山学院大学教授、アメリカのロックフェラー大学の客員教授でいらっしゃる福岡真一先生をお招きしてご意見をいただきたいと思っております。両先生のご紹介、改めて申し上げるまでもないことですが、五百旗頭先生は戦中戦後の日米関係の研究に長年従事されるとともに、その豊かで広範な学識を生かして、歴代政権にも数々の助言、ご提言を行ってこられました。正にわが国における国際政治学の第一人者でいらっしゃいます。福岡先生は分子生物学における世界でも有数の研究者でいらっしゃいますが、近年は動的平衡など専門分野における複雑かつ最先端の知見を、私たちのような一般の人たちにもわかりやすくご紹介され、多くの層から絶大なる支持を集めておられます。

お二方はご専門の分野は異なりますが、共に日ごろの学究活動を通じて、人文知の重要性を強く感じておられると拝察をいたしております。本日はそれぞれのご専門の切り口から、また人文知に関する数多くのご識見にも照らして、今日の世界を読み解いていただけるのではないかと期待をしているところです。特にコロナ禍の中、苦闘する人類の未来に向けて貴重なご示唆をいただけるのではないかと大いに楽しみにしているところです。それではさっそくですが、五百旗頭、福岡両先生からご提言をいただきたいと思っております。まずは五百旗頭先生にお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

意見表明1 「コロナ危機と国際政治～リベラルデモクラシーは普遍的価値たり得るか～」  
五百旗頭眞（公立大学法人兵庫県立大学理事長）

ご紹介いただきました五百旗頭です。コロナと世界のお話を、とりわけリベラルデモクラ

シーは普遍的価値でありうるかというところに言及するようにというふうに発起人の大原さんからご指示いただいたものであります。人文知ということでは思い起しますのは、私は学生時代、京都大学で猪木正道教授のゼミにいましたが、先生は非常にはっきりものを言う人で、学生、院生のうちに、違った、筋がはずれたことを言うとバンバンおっしゃるんですね。それでずいぶんときついことをおっしゃって、教師として精神の認識の背骨のようなものをしっかり通すんだという志の強い方で、学生に対しておっしゃった後、君は社会、政治のことがわかったらんが、それ以前に人間がわかったらんね、人間がわからん者に社会、政治のことはわからんというようなことをおっしゃったのを非常に印象深く覚えております。人文知というのは人間理解と結びついた社会への理解、そういうのを大事にするところだろうという感じがいたします。

コロナパンデミックの中で、人間と社会に関する認識の揺らぎというものが非常に深刻になっているということについて、改めて人文知の在り方を考えたいと思う次第です。コロナパンデミック感染者1億人を超えました、世界で。そして死者も250万人に迫ろうとしております。これは第二次大戦後のいかなる戦争、災害よりも大きい。バイデン新大統領がこの間、アメリカの50万の死者というのは、第一次大戦、第二次大戦、ベトナム戦争を合わせたよりも多いとおっしゃっていましたが、これはたぶん間違いで、それを合わせますと60万を超えらると思うのですが、しかし第二次大戦と朝鮮戦争、ベトナム戦争を合わせたのが50万より少し少ないので、それを言おうとしたのではないかと思います。大変な数です。日本の場合には、先進国の中ではよく抑えられておりますけれども、7,500人の死者に迫ろうとしております。東日本大震災の22,000というのは別格の犠牲者数ですけども、阪神淡路大震災の6,434名、あるいは伊勢湾台風の5,000名、そういうのをはるかに超える7,500名がすでに亡くなっている。第二次大戦後のいかなる戦災、災害よりも大きな被害をもたらしている惨禍であるということになります。

しかも先ほど佐々木先生の基調講演でも論じられたように、コロナ災害は経済破綻を連れ歩くんですね。その両立が課題とされる、その両立の在り方について世界は苦慮している。私のお付き合いのある理工系の偉い教授がある時、非公式な座談の中でこうおっしゃいました。インフルエンザで毎年1万人は死んでいるんだよ、だからコロナも死者1万人までは通常の許容範囲と考えると、経済活動、研究活動をもっと金をかけてやればいいんだ、1万人までは許されることと考えると社会活動を重視するべきだとおっしゃって、なかなか公的に聞かないことを率直におっしゃるなと思いましたが、残念ながらこれは同意することができないです。そういう選択をした、例えばある時期のジョンソン・イギリス首相、それからトランプ大統領はずっとですね、それからブラジルの大統領。両立を図るだけけれども経済活動を軸、橋にしてそれをやろうとしたらどうなったかということ、オーバーシュートを起こしてしまうわけです。コロナは決して甘くない。軽症ですよというようなふりをしながら忍び込んで、大変な惨禍をもたらすわけで、結局オーバーシュートが起こります。そうした国々でもやっていけないというので、もう一度、抑制、ロックダウンまでやるわけですね。



日本の場合には自粛という線でやっておりますけれども。

つまり経済破綻を連れ歩くコロナであり、そして個々の人々の生活破壊をもたらし、そして精神破壊ももたらす。これも佐々木先生がおっしゃったように、人との断絶、排除、分断というものをもたらすコロナなんですね、その意味では大変に。ですから1万人まではいいやと言って、経済活動に軸足を置こうとしたイギリス、アメリカはじめ多くの国が悲惨な失敗に終わったのに対して、日本の周辺では台湾とかベトナムとか中国とか、コロナをしっかりと抑え込む、コロナウイルス、実に侮りがたい敵でありますけれども、弱みがあってそれは宿無しには広まらないということなんですね。人という宿が近くにある限り猛威を振るいますが、それを遮断されるとコロナも自分では生きていけないんですね。それを上手に活かすのが台湾とかベトナムとか中国とか、隔離をしっかりとやる。日本のように自粛を求めるだけじゃなくて、国家の強権をもって断固できる国というのはその面では強みがある。そういうわけでアジアは山中教授のおっしゃるファクターX、遺伝子的に、あるいはコロナにかぶせる帽子のようなものの接触具合によって、アジアは欧米に比べてどこか有利な点があるのかもしれませんが、免疫の働き、まだわかっておりませんが。しかし、遮断という原始的な方法はコロナに対して極めて有効であり、それを上手に使っているアジア諸国。オーストラリア、ニュージーランドのように海に遠く隔てられたところは出入国管理を上手にやります。ゲームチェンジャーが二つある。

一方でコロナを抑える新たなゲームチェンジャーとしてのワクチン。思ったよりも早くできた、奇跡的だと言われるぐらいに早くできてきた。これでもし、アメリカ、ヨーロッパ勢が質の良いワクチンを開発して大成功すれば、地に墮ちたと見える欧米先進諸国の名誉回復という面が出てくるかもしれない。他方負のゲームチェンジャーがコロナウイルスの変異、そして強毒化です。これは怖いんですね。100年前のスペインインフルエンザの時には第1波は軽いものだと思っていたんですね。ところが第2波から変異、強毒化いたしました。若者がかかると2、3日のうちにバタバタ死んでいくと。第一次大戦末期でありましたので、どれだけ死んだかは、各国は自分の国の若者、戦力が失われたということは知られたくないので、国家機密だったんですね。その結果正確な数がわからなくて、控えめに言う人でも2500万人がスペインインフルエンザで亡くなったと言うんですね。普通には4~5,000万人という人が多くて、人によっては1億人が死んだという、信じがたい犠牲者を出した。その変異、強毒化はイギリス株だとか、南アフリカなど出ておりますが、幸い感染力は変異して高まっても、強毒化、殺傷能力が革命的に高まるという風にはいっていない。しかし抑えきる前にウイルスは絶えず人に移る中で変異していきますので、ワクチンを吹き飛ばすほどの強毒化が行われればとんでもないゲームチェンジャーということになる。このワクチン対変異強毒化というのは今つばぜり合いをやっていて、どちらにバランスが傾くか容易には予測できないところであります。

現在、コロナが襲ってきたわけですが、非常に不幸な事態。これも佐々木先生のお話にもありましたが、欧米先進諸国、自由民主主義諸国が著しく劣化している状況にコロナが襲い

掛かってきているんですね。悪い時に襲い掛かる傾きというのが、こういう感染症にはあるのかどうか。いつもではないかもしれないですが、前の第一次世界大戦という人類史上初めての世界大戦の末期にスペインインフルエンザが襲いかかってきた。これはアメリカのカンザス州の陸軍基地がクラスターになって、この辺については後程お話になる磯田さんのお師匠さんの速水融先生、2006年か2007年だったですかね、日本を襲ったスペインインフルエンザという画期的な素晴らしい本を出されて、私はそれを読みました。読んだ後、2009年だったですかね、メキシコで新型インフルエンザが始まったというニュースを聞いてギョッといたしました。陸軍の兵舎が感染母体になったわけです。当然です、三密そのものです。たこ部屋のような所に兵士をたくさん詰め込んで、そして通信のために何をするかという、上官の前に出て行って、ご報告申し上げますってマイクいらぬような大声で唾を飛ばしながら声を掛け合うのが軍隊ですね。それはもうウイルスにとっては理想的な密状態、三密そのものである。ですから大きくそこが感染する場所になるのは当然です。私は当時防大校長でした。防大生は2,000人が8人部屋で生活しているんですね。もし防大に入ってきたら100年前の陸軍兵舎と同じように感染の拠点になりはしないかというので、速水先生の本を読んでいただけに、直ちに大学の幹部の会議で、もし防大にこの感染症が入ってきた場合にどう対応するか、今から研究するようにと指示をいたしました。

それが3月でしたが、7月初めについに防大の中で出てまいりました。私は出張中ですが、夜電話をもらって、わかった、明日途中で打ち切って帰ると、日曜日に防大に出てみますと、副校長以下がもう対応していて、さすがに軍隊は危ない、コロナにとって感染源になりやすい危なさがありますが、他方で非常にさすがと思うところがあるんですね。対応を聞いてみたら、感染した者を直ちに隔離して、同じ部屋の7人をそれぞれ別の部屋に隔離して、そして同じ階の学生舎の中の同じフロアの階段の出入りを監視してできないようにする。さらに五つの建物に分かれています、それぞれの出入り口を閉鎖するというような徹底した対処をやって、できることはすべてやっている。でも、2日目には3名になり、3日目には7名になり、その次の日は2桁になったんですね。つまり、感染が明らかになる前に人に移しているんですね。果たして後追いまいたいになってしまっ、抑えきれないんじゃないかという焦りを感じましたが、これだけ遮断をしっかりやっていると十数名で止まったんですね。7月に陸海空の基地で研修をするのを、夏休みの時に、運動部で合宿をしたのがまた1人感染して帰ってきたんですね、もう一度やりなおし。同じように十数名で止まりました。先ほどウイルスは恐ろしいけれども、しかし宿を失うと案外脆弱な面もあると申し上げたのはそういう経験。いずれにしてもこういう対応ができたのは速水融先生の名著があったおかげで、その点磯田さんにこの機会にお礼を申し上げたいと思います。

ともあれ、自由民主主義諸国が劣化した瞬間という状況についてであります、それを一言申し上げますと、アラブの春という民主化の波が2010年に高まりました。その時には民主主義の大きなうねり、津波が遂にここまで来たんだというように、感銘をもって歓迎された面もあるのですが、ところがその後、旧政権、独裁政権は倒したのですが、しかしその後

期待された民主化は起こらなかったんですね。かろうじてチュニジアがなんとか踏みとどまった。それ以外の国はリビアにしても、ぐちゃぐちゃになっちゃうんですね。どうしてか。それは民主主義は一日にしてならず、ローマが一日でできないように、民主主義も担い手がしっかり育たなければ、統治能力のある政治体制ができあがらなければ民主主義は運営できるものではないんですね。そこで内戦状態になった国からは移民難民の津波がヨーロッパに押しかけてきたわけですね。これでイタリア、フランス、ドイツ、みんな先進諸国が苦境に立ったわけです。そういう中で甘いことを言っていたらダメだと、断固、先ほどの佐々木先生の、いわば排除、分断、それをやらないとダメだという主張が高まる。トルコのエルドラン、エルドラン現象などと言われますが、西ヨーロッパ全般に国家主義的なポピュリズムが高まる。比較的そこから遠いと見えたイギリスもブレグジット、国民投票によってEUから離脱するという、この分断、保護主義の選択をすることになった。それがヨーロッパであります。

アメリカの場合にはイラク戦争の失敗が大きかった。2003年ブッシュジュニアのリーダーシップの下で、911テロに対するいわば報復として、イラクにまで戦争を広げた。大量破壊兵器をもっている。実は間違いであってそれはなかった。間違った戦争に引きずったリーダーシップに対する政治不信は拡大いたします。そしてその5年後にリーマンショックがやってまいりました。先ほどやはり佐々木先生の話にありましたように、1980年代からのアメリカを中心とする資本主義は、小さな政府、減税、規制緩和、自由主義、新自由主義の考え方なんですね。60年代のように大なる社会を作って、ケインズ的な国の関与によって、公平さを実現して、マイノリティを支えようということをするからダメなんだと。むしろ規制緩和をして、力のあるビジネスがしっかりできる人の荷物を降ろして、足についた鉛をはずして、走れるようにしてやればいいという80年代。これはレーガン時代に一世を風靡いたしました。これが冷戦勝利に結びつき、従ってグローバル化はこの流れでいったわけです。

その結果、格差の拡大があるだろう、それは仕方ないじゃないか。いくらお金持ちができて、richは益々richになると言っても、ドル札を彼らが食べてしまうわけじゃない、結局それは社会の周り物なんだから、しっかりと活力を高めればいいんだという考えが80年代の新自由主義だったわけです。それで冷戦終結後、グローバル化する、ITグローバリゼーションが進む中で、好景気でしたので、格差は広がってもまあいいじゃないかと。中間中流的な人にとっても機会はある。ところがリーマンショックで不況になった、格差が大きな不況になったんです。これがアメリカにおけるPoor White、白人層中間的な人たちにとって有色人種たちの側に落とされてしまう、とって代わられるかもしれないというわけで、格差拡大と政治不信の結びついたPoor Whiteの怒りが2016年にトランプ大統領を当選させるということになりました。

トランプ大統領はリベラルデモクラシーに対する尊敬の念が全くない初めてのアメリカ大統領ですね。自由と民主主義というのを国是にしてやってきた近現代、第一次大戦のウィルソン大統領以来のアメリカ政治の伝統を覆して、むしろリベラルデモクラシーを破壊し、

国際協調を破壊することが生きがいであるかのような活動を 4 年間本当に続けました。コロナに対してもトランプ大統領は無知と偏見ゆえの強気で、あんなものは大したことはない。本人は早くコロナにかかっても治られたようですが、多くの人は、50 万人が命を失ったわけですね、世界最大の感染国になった。国際的な共同対処に向かうどころか、かつてアメリカを中心に欧米のリベラルデモクラシーが強かった時には、感染症に共同対処して成功したこともありました。この度はトランプ大統領はそんな共同対処、とんでもない、WHO 離脱だ、中国が悪いんだ、中国ウイルスだという非難にお忙しくなって、世界が人間の安全保障問題、生存が脅かされる人間の安全保障問題なんだと、それに対して人類が共同で対処するほかないんだという認識は全く受け入れずに、中国を叩き潰せと。そして民主主義の殿堂である議会まで 1 月 6 日に扇動して、暴動させるという風な状態となった。それが欧米自由民主主義諸国が大いに衰退しきったとは言いませんが、劣化していた、その瞬間をコロナが襲ったと言えると思います。

他方、中国はどうだったか。中国は勝者にして敗者であった。アメリカなどはしっかりした敗者で通しましたけれども、中国は困ったところもあった。当初 1 か月間武漢にコロナが広がっていたのに隠した、情報を与えなかった。それに加えてコロナが事態を重大化する中で、こともあろうにウイグル、香港での強権支配を強化する、非人間的な権力の活動を強化する。そして南シナ海、あるいは東シナ海の尖閣に対して、これは中国のものだと。世界の公共財であった、シナ海と名はついています、世界が誰でも自由に使えるものであったのを、中国の排他的支配のもとに置こうかとするような埋め立て軍事基地化ということを行って、中国は超法規的存在であって中華帝国の支配というのは当然なんだ、中国は弱っていないぞ、強いんだぞということコロナで世界が苦しむ中で却って力んで見せる。このあたりが中国が敗者である、心ある人は到底敬意を払うことはできない、さもしいことをするなという認識をもたらした点で敗者だと思います。

他方で勝者である面は武漢コロナの抑え込み、大変な力でロックダウンをやって、言うことを聞かない者に対して処罰もすると。3 月 10 日に習近平が武漢を訪問いたしますが、その頃にはほぼ抑え込めるという展望ができていたんだと思います。4 月頃からそれまでどんどん増えていた中国におけるコロナによる死者、4,600 人ぐらいで止まっちゃって増えなくなったんですね。中国人の専門家に聞くと、全然増えていないわけじゃなくて、それ以後死んだ人がいてもそれは別カテゴリーに入れているのではないかというようなことをおっしゃる人もおられますが、私はそれはよくわかりません。しかし少なくとも 4,600 人ぐらいから彼らが発表するコロナ死者というのは増えなくなった。そしてマスクを送る。クチンを送る。自国民にはあまりワクチンをやらずに中間的な欧米の周辺的なところ、ラテンアメリカなどに送る。それによって自由民主主義諸国よりも中国体制の方が優れているんだ、見ろ、経済再生の対処力もコロナを抑える対処力もこちらの方が上じゃないかということを示して、強権政治に加えて先端技術を組み合わせて大変な効果を発揮していることは明らかであります。その意味で勝者の面がある。特にアメリカなど自由民主主義諸国がドジばかりを

踏んでおりますので、それに比べれば勝敗、長短両方ある中国というのは相対的には上で、中国モデルの方がいいんじゃないかというようなことを、途上国などでは、自由と人間性を政治で抑圧する野蛮さについていけない先進諸国の心ある人たちと違って、途上国では食べていくのがやっとだと、そういう境遇の国々には経済の面でもコロナ対処にも強い中国の方が、ある意味影響力を拡大しているという面があるかと思えます。

というので、今や中国型強権支配、先端技術を組みあせた中国型の専制の方が上なんだという風な見方がないわけではありませんが、忘れてはいけない。これは初めてではないんですね。1920年代から30年代に向かう頃、日本では満州事変をやった頃ですね。もう自由主義は古いと、ナチスが出てくる、ドイツでもそうです。政党政治はダメだと、軟弱、懦弱であって、なかなか意思決定ができない。ああいう風な自由主義民主主義はもうこれからの時代には通用しないというので非常に批判されたことがあるんですね。それでいったドイツのファシズム、あるいは日本の軍国主義、第二次大戦で大いに効率を発揮して勝利したかという、結局は敗れて、アメリカを中心にした自由民主主義はもう時代遅れだ、古いと言った認識が間違いであることを自ら証明することになったわけです。

ここで、じゃありべラルデモクラシーというのはどういう概念なのか、どういう考え方に立っているのか、価値観はどういうものなのかについて一瞥しておきたいと思えます。これは本来佐々木先生の実験分野でありまして、2、3時間その講義を受けたいところではありますが、簡単に申し上げますが、自由民主主義の三つ強調しているポイントを申し上げます。

一つは法の支配です。これはローマ法の伝統で、ローマ帝国は滅びました。しかしながらその後ローマ法という普遍的なルールを残したんですね。普遍的な法、価値に服すべきものであるという考え方が、以後西洋を通じて世界に広がっていくわけです。中国はそれを取りません。中国は先ほど言いましたように、皇帝権力は超法規的であって、法律は国を治める上で有用であるけれども、皇帝は超法規、その上にあるんですね。今のトップの人たちは超法規的存在です。それから国際関係の中で中華帝国は超法規的なんです。というので、ローマ法の伝統でたとえ王様であってもルールには従わないといけない。それは身もたえするほど王様にとって辛いことで、王権神授説を振りかざして、絶対王政というようなことを誇ったこともあります。中国はずっとそれでやりました。しかしながら近代の流れの中で、それは次第に、もはや王権神授説を言う人はいない。

2番目の点はデモクラシーですけれども、これは平等性、公平さ。デモクラシーというのはデモスの権力ということの意味しております。デモスというのは人民なんですね。国民の権利。王政をやっておりました時は1人が主権者であって、王様1人。しかし王様1人では危ないというので貴族制で、王様、貴族だけでも足りないというので、新興ブルジョアジーがそれに加わるというので、豊かなブルジョアジーがそれに加わって政治に参加していく。そしてやがて参政権が所得による差別もなくなって全国民にという風に、多くの人々を利害関係者とする政治へ進んでいくのが長期的な趨勢である。これが軸です。民主主義はそれを求めます。そして単に投票権が許されるだけではなくて、やはり格差もいけない。すべ

ての人が健康で文化的な生活を享受される、そういう仕組みにしなきゃいけないという風にして、経済格差にも批判的な立場をとるのがデモクラシーの魂であります。

3番目、リベラルですが、自由と人権。人間尊重の姿勢、思想というのがリベラルデモクラシーの非常に重要なポイントでありまして。中世の神学者であるトマス・アキナスは人間、ペルソナとは何か。理性的本性を有する個別の実体であると定義いたしました。理性的とは何か。彼らに言わせれば神は理性そのもの、光そのものなんですね。しかしその光を一人一人が心の中に小さくももらったように持っている、それが理性なんだと。それを持っているということが人間の偉大さであって、神の似姿であるんだというので、神の似姿としての誰も犯すことのできない人間の存在。それを強調する中で近代の自由権、自由権からさらに生存権的基本権まで広がっていく。

というわけで以上、法の支配、そして多数による支配、そして人間尊重と、人は大切にされるべきだと、そういうエッセンスを持った自由民主主義というのは捨てがたいものがある。一時的な波で上がったたり下がったりはありますけれども実は非常に大事だと。ただリベラルデモクラシーにももちろん限界があり、奢ってはいけません。何よりも衆知を集めると言いながら日本の稟議制なんか特にそうです、時間がかかる、ワイワイガヤガヤ、決定できずにウロウロして不効率である。その間に外国に攻められたら間に合わないという小党分立民主主義の不効率、衆愚制の危険ということは前から言われています。フランスの代表共和制をドゴールが大統領制に変えますね。そういう、つまり強いリーダーシップが同時に民主主義と両立していなければダメだと。日本も近年それが大いに問題になりまして、縦割り行政の中で弱すぎるというので、橋本行革以来、官邸の権限強化、首相の権限強化ということが試みられてまいりました。

もう一つ、自由民主主義が心しなくてはいけない点は、優れた理念、3つの柱を持つ自由民主主義は普遍的価値だと言っていい優れた理念だと思います。しかしその優れた理念と現実の担い手である人々、国家は別です。シミもしわもある人間が担うものなんですね。ですから自由民主主義の名の下で、愚劣極まりない政治をすることだってできるんですね。そしてそれをやったらあの人が悪くだけじゃなくて、自由民主主義そのものがダメじゃないか。トランプがやっているアメリカ民主主義というのに対して、非難するのは誠にごもっともということはいくらでもあるわけです。すべての権力は腐敗する、絶対的な権力は絶対的に腐敗するという有名な言葉がありますが、人間が自らを神とする絶対的正義とした場合に、最大の墮落が起こるということをおかしくおかない。

30年戦争、カトリックと新教が30年にわたって戦争をしたわけです。応仁の乱以上の大戦争を続けたわけですが、ここでどちらも絶対的正義であるキリスト教の神というのを掲げたわけですね。イデオロギーもそのような絶対性、普遍性を主張いたします。それを振りかざす時に、むしろ弊害が大きいくることが上って、30年戦争の後のウエストファリア体制では、そういうことはもう言わないことにしましょうと、控えることにしましょうと。むしろABC順で国はいきましょうとか、いろいろ外交儀礼のルールのようなものを定

めて、どちらが絶対の正義だということを控える方がむしろよろしいという伝統が西洋にはできたのですが、それをひっくり返したのが第一次大戦の時のアメリカのウイルソン大統領。民主主義のための戦争であると、war for democracy、民主主義のための外交を行う、普遍的価値のためにやるということ、もう一度そういうふうに普遍的価値を政治の中に真正面から入れようとしたのです。それは偉大なことかもしれないけれども、非常に危ないことであるということをはっきりわかってはいけません。

もう一つ、民主主義は一日にしてならずと先ほど言いました。縦軸としての1人の王様から貴族、寡頭制、そして民主制の流れというのが歴史の本流であるということは言えると思います。しかしながら他方で横軸として、地理的文化的な多様性、横への展開というのがあるんです。それを、そういうことでは君のところは遅れているからすぐ民主主義革命を起こさない。じゃあ、できるか、アラブの春になるわけです。民主主義への跳躍はできません。担い手がいなければ、統治能力のある担い手がいなければ、結局独裁制や強権制に戻るほかない。ミャンマーのスーチーさんの仲間は残念ながら統治能力が十分ではない。日本でも民主党政権ができましたけれども、民主党政権は統治能力を十分に発揮できずにまた安倍政権に戻ったわけですね。歴史的伝統の中でしか実は格好の政治ができない。普遍的な意味を持つ自由民主主義が望ましいということがわかっている、そこに一気に飛べるわけではない。それを築いていくには長年のプロがいるということを利用してはいけません。自由民主主義は奢ってはいけません、上から目線で他を見下しすぎてはいけません。寛容に困難な問題への理解を持ちながらやっていかなければいけない。という留保を置いた上で、やはりリベラルデモクラシーは人類史上最高の価値観であり、政治制度であると思います。

チャーチルのような逆説的な言い方、民主主義制度が一番悪い制度である、存在しなかったすべての理想に比べれば、という言い方も可能です。人間性にかなう、フランス革命の時、自由平等博愛と申しましたけれども、日本でも板垣死すとも自由は死せずと、人間性の叫びであるわけですね。自由と平等。そういうことを大事にする自由民主主義は波があって、30年代に一度もう古いと言われたように、あるいは1970年代にアメリカの解体論が日本でも語られたように起伏があります。今それ以上にコロナの中で弱ってきたところ、劣化したところをコロナにやられて辛い状況です。けれどもやはり自由民主主義以上の制度というのはなかなかない。

このチャートご覧いただいたら、下の方に青い線があります。これが民主主義を採用している国の数なんです。上の方の赤いのは、これは専制国家、強権国家です。昔はみんなそうだった。そして横に時間軸をとっておきまして、縦線の左が第一次世界大戦、その後ちょっと青が増えますね。これは日本では大正デモクラシーの時代、ワイマール共和国の時代です。しかしながら30年代の反動が起こりまして、軍部ファシズムの時代になって民主国が減って第二次世界大戦ですが、戦争が終わった後、民主制の方がじわじわじわじわと60年代、80年代まで伸びていく。そして冷戦終結、そこでどっと民主主義国家が増えたんですね。そして遂に専制国家、赤と逆転するということまで行って、その一番高いところでアラブ

の春が起こったんですが、しかし維持できない、統治能力を持った人が育っていない、という中でまた下がり気味になり、先ほど言いましたように、移民難民の津波でポピュリズムはヨーロッパでもアメリカでもまた高まるという中で、再逆転するかのようになっている。

こういうのであって大きな趨勢を見れば、やはり民主主義政治は人間性になかった、私が死んでも自由は死なせないという風なもの、素晴らしいものを秘めているんですね。そういうわけでもう中国の強権体制が勝利して、自由民主主義は死ぬよということは、この図をご覧になれば短絡的すぎる。そうではなくて、奢ってはいけない、問題は多い、でもその中でやはり大事にしていくべき自由民主主義ではないか。人文知というのと深く結びついた三つのポイントを重視する価値観である自由民主主義をこれからももう一度育てなくてはならないのではないかと申し上げて私の報告とさせていただきます。どうもありがとうございました。

意見表明2「科学技術にとって人文知とはなにか」 福岡 伸一（生物学者・青山学院大学教授・米国ロックフェラー大学客員研究者）

生物学者の福岡伸一でございます。私は理科系の立場から人文知の意味あるいは意義について述べさせていただきたいと思えます。スライドを用意いたしましたのでこれをご覧いただきながらお話を聞いてください。

私は生物学者になる前は、ずっと昔の少年時代は虫が大好きな昆虫少年でした。ここにスライドで示しましたように、これは私が撮影したアゲハ蝶が蛹から出てきて羽を伸ばす瞬間なんですけれども、こういうものを見つめて、生命のすばらしさ、あるいは生命の尊さというものを感じ入っていました。昨日まで芋虫だったものが急に止まって蛹になり、それから10日ほどたつと、一旦蛹の中では幼虫の細胞がドロドロに溶けてしまって黒い液体になるんですが、その中からこのような美しい蝶が再構成される。こんな劇的なメトモルフォーセスもないわけですし、私はこれに魅入られて生命というのはいったい何だろう、what is life?という疑問を持ちました。この蛹の中で劇的な細胞変化が起きているということは、実はこの現代の最先端の科学をもってしても完全には解明できていない現象なんです。ですから what is life?生命とは何かという問いは、少年の素朴な疑問であると共に、現代科学の大きな問いでもあるわけです。そして生命とは何かという問いは、人文知にとっても大きな問いであるし、人間文化の長い歴史の中でも芸術、文学あるいはその他の様々な人たちが問いかけた疑問でもあるわけです。

20世紀の最初の頃に、アンリ・ベルグソンという哲学者がいましたけれども、哲学者にとっても生命とは何かというの大きな問いであって、次のような言葉を残しています。生命には物質の下がる坂を登ろうとする努力があるというふうにベルグソンは生命の特性を捉えています。私はこの言葉を胸に抱いていましたけれども、なかなかこれを具現化することはできませんでした。むしろ20世紀はベルグソンの言葉を忘れて、もっと機械論的に生命を捉えるトレンドがどんどんどんどん進展していきました。一つは1953年にワトソンと



クリックという人が DNA の二重らせん構造、DNA double helix というものを発見し、分子生物学の幕が切って落とされました。実はこのワトソンとクリックの発見の裏にはロザリンド・フランクリンという女性科学者が解明した非常に重要なデータがあって、それをワトソンとクリックが盗み見たことによって、二重らせん構造の解明ということにつながって、ワトソンとクリックはノーベル賞をとったんですけれども、ロザリンド・フランクリンはその栄誉に浴さなかったということで、ここには科学におけるジェンダーの問題が潜んでいるんですけれども、今日の本題ではないので一言触れるだけといたします。

この DNA の二重らせん構造が明らかになったことによって、20 世紀の生命とは何かという問いに対して、非常に明確な答えがもたらされました。それは生命とは自己複製するシステムだというふうに定義されたわけです。つまり DNA というのは自分自身をコピーしながら増え続けるものだと、そして DNA の自己複製というものが生命の唯一無二の目的であり、進化の歴史というのはこれをずっと繰り返してきた。ある意味で DNA というのは非常に利己的に自分が増えることだけを目的としてきたという、利己的遺伝子論みたいなものが非常に喧伝されたわけです。

それからその前史をちょっと見てみますと、1940 年代にはアメリカのロックフェラー大学にいたエイブリーという科学者が DNA という物質こそが遺伝子の本体であるということ突き止めたわけです。ということで、20 世紀は半ば頃から、非常に生命を機械論的に見る、あるいは生命を情報として見なすという流れができて、これが現代までずっと続いているわけです。遺伝子を捉えてその遺伝子を解析することによって生命現象を明らかにし、遺伝子を操作することによって生命を操作できるというふうに考えてきたし、バイオテクノロジーもその方向に進んできたわけです。しかし更に歴史をもう少しだけ振り返って見ますと、1944 年にシュレーディンガーという物理学者が What is life? という本を書いています。これは今では岩波文庫あるいは元は岩波新書だったのですが、翻訳されていて誰でも読めるようになっていて、彼は物理学者だったんですが哲学的な側面もあって、生命とは何かということを一一般の人にわかるようなレクチャーとして小冊子を書きました。

この本を紐解いてみますと二つの大きな章に分かれていて、その内容は二つのことが書かれていました。一つは、遺伝子は非周期的結晶であるという予言なんですね。これはまだ DNA がわかっていなかった時に、DNA のことはまだわかっていなかったのですが、遺伝子というものがあつたとすれば、それは非周期的な結晶であると予言していて、DNA というものの存在、そして DNA が二重らせん構造をとっているということをおある意味で予言していたということで非常に評価が高い本なんです。ですからこの本は前半部分をみんなが注目して読んで、かのワトソンとクリックもこの本に啓発されて遺伝子の研究を行い、それが二重らせん構造であるということ解明したわけなんです。ですけれどもこの本の後半部分にはある意味で非常に重要なことが書かれていました。それは生命はエントロピー増大則に抗しているものだという言明だったんです。これは実はアンリ・ベルグソンが、生命というものは転がっていく坂を登っていく努力があるということをお言っていたことと、軌

を一にしている生命が持っているもう一つの重要な側面を捉えている言葉なんですね。ある意味で遺伝子を情報として見る、非周期的な結晶という情報として見る見方と、もう一つ、生命が持っているもう一つの特性、エントロピー増大則に抵抗しているという、そういう面を見ている。こういう二つの思想がここに混在しているわけです。私が今日述べたいのは、科学というのは必ずしもデータを元に何かを分析しているのではなくて、何かを考える時の枠組みとして常に人文知的な知恵、あるいは人文知的な哲学的な枠組み、パラダイムの枠組みというのを知らず知らずのうちに援用しているということなんですね。このシュレーディンガーの本も、一つは遺伝子を情報として見つつも、もう一つは生命をエントロピーの増大則に抗しているものだという風に見ているという、人文知的な、つまりベルグソンの考え方を援用しているわけです。

エントロピーの増大の法則というのは、宇宙の大原則でありまして、秩序あるものは必ず秩序がない方向にしか動かない。形あるものは形がなくなるし、壮麗なピラミッドみたいなものも長い年月の間では風雪とともに砂塵に帰してしまう。整理整頓しておいた机の上もあつという間に汚くなっていくし、入れたての熱いコーヒーもぬるくなってしまふ、あるいは熱烈な恋愛もすぐに色あせてしまふというような、実はすべてエントロピー増大の法則が我々の世界に降り注いでいるからです。生命みたいに非常に秩序だった仕組みというのは、絶えずエントロピー増大の法則に壊されよう、壊されようとしています。細胞は酸化されようとするし、タンパク質は変遷したり分解されようとしています。これに生命は対抗している。そういうことを言っているわけなんです。ただベルグソンもシュレーディンガーも、では一体どうやって生命がエントロピー増大の法則に抗しているかということまでは説明できなかったんですね。しかしここにも歴史の教えがあると私は思っています。これまた科学における人文知的なアプローチの重要なことで、科学を知るためには科学史を知らなければいけないと常々私は考えています。つまり科学というのは、単にその最先端の現象を解明しているだけではなくて、必ず歴史的な時間軸の上によって進んでいるということなんです。

では年表を進めてみます。そうするとシュレーディンガーが *What is life?* という本を書いたよりも前に、実は生命は機械ではない、生命は流れだ、という風な言明をした人がいたことを思い出すことができます。これは詩人の言葉、哲学者の言葉のようにも聞こえますけれども、これを言ったのはシェーンハイマーというドイツ生まれのユダヤ人で、亡命してアメリカにやってきた人が言ったことで、*Life is in a flux* というヘラクレイトスと同じようなことを、もう一度科学の言葉で言い直した人がいるんですね。このルドルフ・シェーンハイマーさんというのは 1898 年に生まれて 1941 年に 43 歳という若さで謎の自殺を遂げてしまった科学者なんです。ですから私が書いた著作を読んでもらった方であれば、シェーンハイマーが私のヒーローであることを理解していただけると思うのですが、一般的にはシェーンハイマーは無名の科学者でノーベル賞をとったわけでもなんでもないので、歴史の闇に消えてしまった科学者となっています。でももう一度このシェーンハイマーの行った

仕事に光をあてて再評価することによって、生命を情報として見すぎる現代的な機械論的な見方に対して、もう一つ対抗軸をもたらすことができるのではないか。それはベルグソンやシュレーディンガーが考えた、生命がエントロピーに対抗して戦っているという、ある種のもう一つの人文知的な知恵からやってくる What is life? に対する答えなんですね。

シェーンハイマーがいったい何を明らかにすることによって、生命は機械ではなくて生命は流れているものかと言ったのかというのを簡単な漫画で皆さんと後付けてみましょう。シェーンハイマーは生命とは何かという疑問をもう少し簡単なモデルに置き換えました。それは毎日毎日私たちは生きていくために食べ物を食べ続けなければいけないわけです。食べ物を食べ続けるというのはいったい生命にとってどういうことか。それはすでにシェーンハイマーの時代、生命の見方というのは機械論的、情動的な見方に傾いておまして、誰もが簡単なことだと考えていました。つまり食べ物と生命の関係は、ガソリンと自動車の関係で、自動車を動かすためにはエネルギーとしてのガソリンがいる。それと全く同じように生命活動を維持するために動いたり、体温を維持したり、代謝をするためにはエネルギーがいる、そのために食べ物を食べる。食べてしまうと自動車のガソリンと同じように燃焼されてエネルギーを発生し、燃えてしまっても燃えかすが出るのでまたガソリンが必要になるわけです。それと同じように私たち生命も絶えず食べ続けてエネルギーを消費しながら生きていくしかないという風に考えていたわけですね。

シェーンハイマーはそれは確かにそうかもしれないけれども、そうすると食べ物と諸活動の収支が完全に一致するかどうかということをしちんと分子や原子のレベルで見極める必要があるのではないかという風に科学者らしく考えたわけです。つまりインプットとアウトプットをちゃんと調べてみようということなんです。でもそれを行うのは、今から 100 年ほど前にこの実験を正確に行うのはなかなか困難だったんです。というのは、我々生命体というのは 17 世紀ぐらいからどンドンミクロな方向へミクロな方向へ解体されていきまして、我々は細胞からできているし、細胞はタンパク質や DNA という高分子でできているし、高分子は低分子に分解できて、低分子は酸素とか窒素とか炭素とか水素といった原子にまで分解できるわけですね。ですから究極の目で生命を見るとつぶつぶの集まりだということになります。

一方、食べ物の塊も植物性のものにせよ、動物性のものにせよ、他の生命体の一部をもらってきているものなので、これまた粒子の塊ということになります。そうすると仮にここに粒子が 100 粒あったとして、これが生物の体の中に入って行って燃やされてエネルギーとなったとして、燃えかすが二酸化炭素として出てくるとしても、粒粒同士が一緒になってしまうと今食べた粒がどこに行ってしまうかわからなくなってしまいますので、収支を見るためには食べる方の粒子に何らかの印をつけておかないと追跡できないわけです。しかしこんなことを誰も実現当時はできなかったんですね。シェーンハイマーは一つ、物理学の方からわかってきた非常に素晴らしいアイデアを思い付いたんです。それはアイソトープというものを使って粒子に標識をつける、色をつけておけば追跡できるという考え方なんです。今

日はアイソトープの詳細な説明は省略いたしまして、消えないマーカーペンで原子の一粒一粒に標識をつけたとを考えてください。この標識は味にもにおいにも栄養価にも影響を及ぼすことはなくて、特別な質量分析計というもので調べると初めて可視化できるんですけども、生命にとっては見えないし感じる事ができない、そういうものなわけです。このアイソトープで標識した食べ物を食べさせて、それが実験動物の体の中でどのように使われてどのように抜け出ていくかをシェーンハイマーは実験的に調べようとしたわけです。

実際この食べ物を食べさせてみますと、非常に驚くべき結果が明らかになりました。食べ物の原子の半分以上は燃やされることなく、ネズミの体のしっぽの先から頭の中、筋肉の中、骨の中、いろんなところに溶け込んで、ネズミの中の一部に成り代わってしまったわけです。これを先ほどの自動車とガソリンの例えで言いますと、ガソリンが自動車の中に入ったら、タイヤの一部になったり、ガラスの一部になったり、座席の一部になったり、ハンドルの一部になってしまうということで、自動車とガソリンだったらそんなことは起こらないわけなんですけれども、食べ物は体の中のいろんな部分に溶け込んでしまっていたわけです。シェーンハイマーはこの実験を非常に厳密におこなっておりまして、実験をする前のネズミの体重を量っておきました。このネズミはもう大人のネズミなので成長過程にはないんです。で、どんどんどんどんこの緑色に標識した食べ物を食べて体の中に緑色の粒子が増えていく、そういう状態の体重も量り、このネズミの体から出てくるあらゆるもの、フンとか尿とかフケとか髪の毛とか、あるいは呼吸中の呼気ですよ、そういうものを全部集めてどこに食べたものがいくかを全部きちんとトレースしていったわけです。そうするとこの実験の途上で、ネズミの体重はほとんど1グラムも変化していませんでした。緑色の粒子が体の中に増えているにもかかわらず、どうしてネズミの体重は変わらないのか。シェーンハイマーはこの実験を次のように非常に鮮やかに読み解いたわけです。

我々が食べ物を食べるというのは、単に自動車みたいにエネルギーを補給しているだけではなくて、実は私たち自身の体を作り変えている、入れ替えているということです。食べ物を食べるとその原子や分子は体の一部になりますけれども、そのとき同時に、すでにその時に体を作っていた原子や分子が体の中から抜け出ていく。とういことで、実は私たちの体というのは絶えず分解されて絶えず合成される。そのぐるぐる回っている動きを止めないために食べ物を食べ続けているんだということが明らかになったわけです。シェーンハイマーの実験によりますと、私たちの体の中では早く交換されていくところとゆっくり交換されていくところがあることがわかりました。皆さんも爪とか髪の毛とか皮膚とかが交換されていることは実感できると思いますけれども、体中のあらゆる部分がどんどんどんどん分解され、食べたものの原子や分子と交換されています。一番早く交換されているのは、実は消化管の細胞でして、消化管の細胞は2、3日で新しい細胞と入れ替わっています。古い細胞は捨てられていきます。ですから実はうんちの主成分というのは、食べかすが出ているのではなくて、自分自身の体が捨てられている。その代わり新しい細胞が食物から作られて並んでいく。筋肉とか肝臓とか血とかも時間の長い、遅いはあれ、多かれ少なかれど

ん変わっていきます。歯とか骨のようにかちっとしているところでも内部はどんどん入れ替わっています。脳細胞ですら配線は変わらないですけれども、脳細胞の中身はすごい速度で変わっていきます。

とういことで、私たちは生きていながらにしてどんどん作り変えられているわけです。よく久しぶりに会った人に、やあやあ、お変わりありませんねって言いますが、これは生物学的には間違っています、久しぶりに会った人に会うと、その人は1年前のその人と今日のその人は、物質レベルではすっかり入れ替わっていると言っても過言ではないので、お変わりありませんねと言わないといけないんです。でも私たちは一応その人はその人だという風に認識しているわけです。この不思議はどのように解けるかという、それもこの実験から解けるんですけれども、その種明かしをする前に、シェーンハイマーの実験が明らかにしたということは、この環境中から食べ物で私たちの体の中に絶えず物質とエネルギーと情報が流れ込んで、それが絶えず私たちの体から抜け出ているということなんです。つまりここにネズミの形があるように見えますけれども、これはかちっとした固体ではなくて、流体、流れ流れているものであって、ゆるく分子や原子がよどんでいるだけに過ぎない。ということで、ここにあるのは日本の方丈記の冒頭にあるように、行く川の流は絶えずして元の水にあらず、流れに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし、という風に歌われていることが、現実として起こっているんです。ですから私はここにも人文知が洞察していたことが、科学によって追認されているという風な姿を見ることができます。

シェーンハイマーは英語で論文を書いておりました、このように人間の体というのは絶えず入れ替わっているので、ダイナミックステートにある、動的な状態にあるという風に言いました。私はこの考え方が情報的に生命を見すぎるやり方に対して、もう一つ自分自身が生きているという内部から自分自身を観測する大事な見方だと思うようになりまして、ダイナミックステート、単なる動的な状態というよりは、絶えず動きながらもバランスを取り直している、平衡という観念が非常に大事だと考えて、動的平衡という言葉で生命の特性を表す。生命とは何か、What is life? と聞かれたら、それは動的平衡であるという風に答えたいと思っているわけです。英語では dynamic equilibrium という言葉を充てることにしています。動的平衡というのは作るよりも壊すことを一生懸命やっています。どんどん壊して作り変えています。私たちの体はあらゆるところで壊しているんです、そのかわり作っている。それはなぜかと言うと、エントロピー増大の法則に抵抗するためです。エントロピー増大の法則がどんどん私たちの体を壊そう、壊そうとしているわけです。それに先回りして自ら壊すことによって作り替えるというある種の自転車操業を行っています。このことによって大きく変わらないために、絶えず小さく変わり続けているのが生命体で、この分解と合成の絶え間ない均衡の上に成り立っているわけです。ですから生命というのとは何かなくても何かピンチヒッターするというような代替可能性があり、環境が変われば柔軟に変わるし、押されたら押し返すというようなりジリアンス、可変性を持っている

し、病気になれば回復するし、怪我をすれば修復するという、生命が持っている柔らかさというものは、あるいはその回復力、レジリエンスみたいなものはすべて動的平衡が支えているということが言えるわけなのです。

じゃあ先ほどの疑問、どうして絶え間なく入れ替わって 1 年もたてばお変わりありまくりになっている、物質レベルでは別人になっているにも関わらず、どうして私は私であり、記憶はある程度の記憶として自己同一性を保てるのか。それも動的平衡の考え方を拡張することによって読み解くことができるんです。それは、私たちの体というのは動的平衡状態にありますけれども、それは単に部品が集まっているだけではなくて、パーツとパーツの間に相補的な関係が成り立っています。細胞と細胞はちょうどこのジグソーパズルのように前後左右上下の細胞と形、あるいは科学的な状態をコミュニケーションしながらお互いに感知しあっているわけです。つまり互いに他を律しつつ互いに他を支えている、相補性というのはそういう意味です。ですからジグソーパズルのピースの真ん中が今分解されて捨て去られても、周りに残っている八つのピースがあれば真ん中のピースの形と場所が維持されるわけです。そこで新しいピースが真ん中に入っていける。私たちというのは大きなジグソーパズルのようなもので、同時多発的に全身のあらゆる細胞、あるいは細胞の中のタンパク質が入れ替わっているわけです。しかしそれは全部相補的な関係の中で存在していますので、部分的に変わっても絵柄全体は変わらないでいられる。だから同一性がある程度は保たれる。しかし長い年月の間にはエントロピー増大の法則に完全に打ち勝つことはできないので、この相補性も少しずつ乱れながら衰えていくというのが老化であり、それが最後はエントロピー増大の法則に負けてしまうというのが寿命であるということになります。

そうすると情報的に生命を見すぎる見方、機械論的な生命観、それに対して人文知がベルグソンの頃から教えてくれていた動的平衡の生命観という二つの生命観というもののパラダイムがあるとすれば、この二つを使ってどういうふうに世界を違って見ることができるかということをお示ししたいと思います。これは 4 歳ぐらいの子どもが描く人間の絵で、教育学の用語では頭足人と名前が付けられている可愛らしい絵で、人間を描いてごらんとすると、目、鼻、口に手足をつけるという風に、誰にも教えられることなく、子どもはだいたい人間というのはパーツからできているというふうに認識してしまっているわけです。これはある種のロゴスの力というか、言葉の力によって人間というものを分解して見ているわけです。でも実は人間というのは本当は分解できない。どこからどこまでが鼻だということは言えないわけです。三角形に区切って境界をつけていますけれども、ある人から別の人に鼻を移植しようとしたら、ブラックジャックでもどこまで切れば鼻か、どこまで深くえぐってくれば鼻を取り出せるかということは決められないわけです。鼻というのは見かけ上顔の真ん中にありますけれども、鼻の穴から脳に向かって穴があいていて、そこに嗅覚上皮細胞というにおいを検出する細胞があり、そこからレセプターがにおいの分子を検出すると、神経繊維が脳の奥に到達して行って、においを分析する脳細胞があり、いい匂いだったら近づいていくし、嫌な臭いだったら逃げるというような、体全体のシステムとつながっ

ているわけなので。目とか口とか鼻とか手とか足とかを本当は分解することができないということで、機械論的に見ると人間はロボットのように見えますけれども、動的平衡の観点から見ると生命には部品と呼べるものはないということになります。

同じことは時間軸についても言えまして、脳死問題というのが古くから議論されていて、現在では脳が死ねばその人は死体とみなせるという風に法的に決められるようになりました。でももう一つのノウシ問題というのがありまして、脳が始まる方の脳始問題。脳が死ねばその人が死ぬのであれば、その人はいったいつから始まるかというのは、脳が始まればその人が始まると考えてもいいんじゃないかというふうに科学者が考え始めています。脳が始まるのはいったいつかというと、受精卵ができて、胎児が作られていく、人間の妊娠期間はだいたい 290 日、十月十日と言われてはいますが、脳ができるのはかなり後なんです。全体の 4 分の 3 ぐらいが終わったところで脳ができるので、その時が人ができる、人格ができるというふうに見なしてしまえば、それ以前は単なる細胞の塊なので、いろんなバイオテクノロジーのために使ったらいいとか、中絶をしていいという風に話がどんどんどんどん進んでいってしまいます。現在中絶は妊娠 22 週目以前でないとできませんけれども、脳始、脳が始まるところが人が始まるのであれば、30 週以降でも中絶が可能になってしまいます。ということで、こういうふうに機械論的な生命観は人間の寿命にこう分節点を入れているわけなんですけれども、実は脳が始まって、脳が死ぬ時点を作ると、人文知的な観点から見ると、我々の人生は両側から締められているということになってしまいます。ここでも生命の時間に分節点はないわけですね。

同じような思考というのは、いろんな、私たちが普段体験している現象にも言えまして、実は私は大変な花粉症持ちでして、今の季節非常に苦しくて、今日も抗ヒスタミン剤を飲んで鼻水が出ないようにしているんですけど、これは本当はあまり良いことではないんです。なぜ良いことではないかというと、花粉症というのは症とついてはいますが、本当の病気ではなくて、免疫システムがちょっと暴走しているわけです。どういう風に暴走しているのかと言うと、花粉が来ると免疫細胞が外敵が来たぞと驚いて周りに SOS 信号を出します。これがヒスタミンというもので、これが流れていくとヒスタミンレセプターというものに結びついて別の免疫細胞がくしゃみや鼻水や涙を出します。分泌物を出して、できるだけ早く体から外敵を洗い流そうとするわけです。でも花粉は次から次から来るのでずっとこの反応が起り続けて苦しいというのが花粉症なわけです。これを止めるにはどうすればよいかというふうに考えられた。機械論的に考えればどこかを遮断してやればいいので、そういう考え方で抗ヒスタミン剤というものができました。抗ヒスタミン剤は細胞が本来的に内部に持っている SOS 物質のヒスタミンというもののまがい物です、偽物です。でも構造が似ているので、これを飲むとレセプターに先回りします。そうすると花粉が来て、ヒスタミンが出ても先客がいるのでブロックされて入れない。で、抗ヒスタミン剤は細胞をブロックするだけで、レセプターをブロックするだけで命令を出さないで、こういう状態で細胞を止めることができる、めでたしめでたしというのが抗ヒスタミン剤が効く理由な

んですけれども、これは機械論的に生命を止めて見ているからこういう風に見えるだけなんです。

実は生命は動的平衡で時間の関数として押されれば押し返すし、沈めようとすれば浮かび上がるので、もし私が花粉症を恐れてずっと抗ヒスタミン剤を飲み続けているとどうなるかという、こういう風にリベンジが起きて、細胞はもっとたくさんレセプターを準備するようになるし、ヒスタミンをたくさん準備するようになってしまいます。そうすると花粉が来て大量のヒスタミンが出て、それが大量のヒスタミンレセプターに結びついて、私はもっと激しくしゃみや鼻水や涙にさいなまれるという、花粉に過敏な体質を自ら導いてしまうという逆説に陥ってしまうわけです。これもやはり科学的に生命を情報として見すぎる見方から一歩退いて、人文知が教えてくれているような、ある種の時間軸で物事を見る、あるいは内部から観測する。そういう風にして得られた動的平衡の観点から生命を見直すと見えてくることがあるということで、私は自分の個人の研究史というのは機械論的な生命観から動的平衡の生命観へ自らパラダイムシフトしたというのが、私自身の個人の研究としてあるわけです。でもこのことは大きな文化史全体の中にも多々言えることでして、科学技術というのは常に人文知を羅針盤としながら、自分の立ち位置を見つめ直していくべきものだなという風に考えているわけです。以上で私の話を終わらせていただきます。今日はお清聴ありがとうございました。

榊原：五百簾頭先生、福岡先生、本当に素晴らしいご示唆をいただきましてありがとうございました。五百簾頭先生からは昨今の国際情勢を見据えて、コロナ危機に立ち向かう上でリベラルデモクラシーの真髄である人間尊重の理念、さらにはその下での国際協調の重要性といったことについて、政治体制の歴史の変遷にも立ち返った大変奥行きのあるお話を頂戴いたしました。また福岡先生からは What is life? 生命とは何かという人類の大きな命題に対して機械論的なアプローチと対しながら、生命が流れる時間の中で一定の形を維持するために絶えず分解と合成を繰り返すと、いわゆる動的平衡の概念でとらえることの重要性について、大変わかりやすくご紹介をいただきました。あと 10 分ほど時間がありますので、私たちの理解を深めるために、両先生に一言ずつお話をさせていただきたいと思います。

両先生にお尋ねしたいと思うのですが、両先生共に、長年教職者として多くの学生を指導してこられましたけれども、学校教育を通じて人文知を兼ね備えた人材を育成する。その裾野を広げていく上で今後必要となる取り組み、あるいは課題について、日ごろ感じておられることがあればお伺いしたいと思います。あわせて我々はこの今日の人文知フォーラムですが、人文知に関する知見やメッセージというのを広く社会に発信することによって、その普及、啓発に取り組んでいきたいと考えているわけですが、こうしたフォーラムの活動について何かアドバイスがあればお伺いしたいと思います。五百簾頭先生、コメントいただきたいです。



五百簾頭；コロナというのは大変な弊害で先ほど言ったようにそれ自体が命を奪うだけじゃなくて、経済破綻、精神破綻まで呼び起こす。ですが、しかしそのポピュリズムに毒されて劣化をきたしていたそこから立ち直る機会にもなりうるんじゃないかという気がするんですね。オンラインでやる、デジタル化ということに、日本は先進諸国の中あるいはアジアでも遅れがちであった。それをこの機会にしっかりと取り戻す。私の娘夫妻はそれぞれ違う職にしながら、オンラインに大変に今力を入れて苦勞しています。孫は暗くなるまで公園で遊びほうけていますけれども。デジタル化ということにデジタル庁まで作って対応しなきゃいかん、その通りです。ただ IT や AI、それで問題が解決するわけではない。

平成の日本というのは、ご自慢の経済は失われた 10 年、20 年と言うし、北朝鮮や中国のように脅威も理論的ではなくてリアルに迫ってくる、そして大災害が頻発するという、三重苦の中にあるわけですね。であれば、日本も移民の津波で荒れたヨーロッパのようにポピュリズムがもっと高まって、人はささくれだって不思議じゃないと思うのですが、平成の 30 年というのは日本人は優しさを失っていないんですね。ますます、例えば災害の時に言えば、災害弱者、要援護者、そういう人たちも一人も取り残すなというような運動、例えば別府市の女性の職員が一番弱い人を災害の時に支えるんだという運動をやって、大変感銘を与えたりしているんですけど、三重苦の中で今まで以上に人に優しい生き方を大事にしようとしている。つまりデジタル化の科学技術の方をしっかりとこなすということは大事です。それをやるということは絶対に大事な仕事ですが、それで済むのではなくて同時に人に対する優しさ、コミュニティの中に人間の息遣いというようなものを大事にしていく。

コロナが治ってきたらやはり私の愛するキャンパスの中での青春、出会いであるというふうなことを戻していかなくちゃいけないと思うんですね。長い目で見たらその両方が非常に大事で、コロナの中でずいぶん悲惨なことがあった。悲惨なものを見るとするのはもう一度人間性の輝きというふうなことを意識する機会になる。そういう意味で人間らしいコミュニティを再建するという人文知努力というのをデジタル化と両方頑張っていけないといけないなと思っております。

福岡；私は大学教授として長年教育に携わっておりますけれども、一つ感じることは日本の学校教育において、中学あるいは高校のかなり早い時期から理科系と文系にコースを分けてしまうということの一つの弊害があると思います。そこで discipline を分ける、そしてそれぞれが専門性を追求するというその志はいいんですけども、結局そこで分けるということの大きなモチベーションは、単なる受験勉強の科目の選択ということになってしまって、それ以降自分の discipline を理科系的な知を基盤にして作っていくのか、あるいは文系的な知を基盤にして作っていくのかということが、やや受験

が終わってしまうとおろそかになってしまっ、理科系に進んでしまった人は人文知を欠落したまま大人になってしまう。人文系に進んだ人は理科系的知を欠落したまま大人になってしまう。だからよく私は全然理科系のことがわからない文系人間ですからって言う人がいるんですけども、その方はどれくらい深い人文知を持っているかというところかなり心もとない。逆に私は理科系なので文系のことはよくわからないんですという人も、どれくらい理科系の専門知をもっているかというところ心もとないということで、そこに大きな溝ができています。

二つの文化という、スノーという人が警鐘を鳴らした本がずっと昔にあったんですけども、同じような問題があるなと思っています。私は京都大学で学んだんですけども、京都大学が、私がちょうど学んだ 1980 年代ぐらいには教養部というのがあって、大学に入ると 1 年生、2 年生というのは基本的に専門に入るまでに何を学んでもどういう風に学んでもいいという、完全な自由な時代が 2 年間ありました。その時に文系の人も理科系の人も自分の思いのままにいろいろな知識の存在に触れ、それを一生懸命にやっている変な先生たちがたくさんいるんだということを知りながら、クロスオーバーで知の領域を渉猟するというか、散策することができて、それは非常に互いの知識の在り方、学問の在り方ということを垣間見ることにすごく重要な示唆を受けました。私自身も最初工学部系にいたんですけども、先ほど申しましたように機械論的な生命観から動的平衡の生命観に自分のパラダイムをシフトするにあたって、理科系分野から総合文化政策学部という文理融合の学部に移させてもらった、学生がよく進路に悩んで移る例はあるんですけども、先生が移ってしまったという稀有な例だと思うんですけども、移りました。そして分離融合型の学部で教育をしてみると、これまた新しい問題に直面してしまうわけですね。

つまり学生は文系でも理系でも学べる、そしてその融合型の知を学べるというふうにある種オールマイティーで学べるので入ってくるんですけども、そうするといい自分が何を学んでいいのか、自分の専門は何なのかという自分の discipline を見失ってしまう人たちが今度現れるわけです。ですから望ましいのはやはり、まずは自分の基本となる分野の discipline というか基礎学力を身につける。それは古典的な法学であるとか文学であるとか経済学であるとか化学であるとか数学であるとか生物学であるとか、そういったものの基礎をしっかりと身につけた上で、その上に融合型の知を構築していくのがいいのではないかなというふうには感じております。

榊原；ありがとうございます。まだまだ両先生にお伺いしたいことがたくさんあるわけですが、残念ながら終了の時間が近づいてまいりました。本日は五百箇頭先生からは国際政治学、福岡先生からは分子生物学という、それぞれのご専門の見地からコロナ禍をはじめ、現代社会が抱える様々な課題について私たちがどう向き合っていけばいいのか、大変貴重なご示唆をいただいたと思います。両先生のご専門は異なるわけですが

が、いずれのお話にも人文知への深いご理解、人文知への深い洞察がうかがえまして、問題を複眼視的な視点から捉えることの重要性を痛感した次第でございます。人類がコロナ危機を乗り越えて新たな社会を作り上げていく上で、人文知の果たす役割はますます重要になると考えられ、今後大いに研鑽を深めてまいりたいと思った次第でございます。五百簾頭先生、福岡先生におかれましては本日大変お忙しいところ、貴重なご講演をいただきまして改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。第1部はこれで終了させていただきます。

## 第2部 人間文化研究の現場から

コーディネーター 長谷山彰（慶應義塾長）

皆さん、こんにちは。このパートのコーディネーターを務めます長谷山彰です。よろしくお祈いします。第2部では、人間文化研究の現場からというテーマにふさわしく、人間文化研究機構を構成する二つの機関である国際日本文化研究センターと国立民族学博物館でそれぞれ日本近世近代史、比較文学、比較文化の専門家としてユニークな研究活動を展開されているお二人にお話いただきます。人類の長い歴史を振り返りますと農耕や牧畜など人類の活動が盛んになるにつれて、自然界と人間界の接触、ウイルスと人間の共生が始まり、疫病の流行が繰り返されてきたことがわかります。歴史上の様々な人間の営みや文化を文字や図像に描かれた記録から読み解こうとしている専門の研究者の目には、今回の新型コロナウイルス感染症と人間の関係がどのように見えているのか伺いたいと思います。

お一人目の磯田道史さんは慶應義塾大学大学院で学ばれ、茨城大学助教授、静岡文化芸術大学教授を経て、現在国際日本文化研究センター准教授をお務めです。新潮ドキュメント賞を受賞し映画化もされた武士の家計簿や東日本大震災をきっかけに、過去の地震や津波、火山噴火など天災による被害状況を古文書の中に発掘し歴史の教訓として読み取ることを訴えた、天災から日本史を読み直すなど多数のご著書がありますけれども、特に昨年出版された感染症の日本史では感染症を文明の歴史、医療生活史という視点から定量的、定性的に体感するという構想の下に、平安時代の史書、江戸時代の随筆のほか、原敬日記や永井荷風の断腸亭日乗、大正天皇実録と昭和天皇実録など政治家や文豪、皇室から市井の人々に至るまでの日記といった多くの資料を丹念に分析し、感染症と対峙してきた人々の行動や人生を浮き彫りにしています。本日は人文知でパンデミックに対峙するという表題でお話いただきます。それでは京都会場においでの方の磯田さん、お祈いします。

「人文知でパンデミックに対峙する」 磯田道史（人間文化研究機構国際日本文化研究センター准教授）

磯田でございます。よろしくお祈いします。京都会場とは申しながら、本当は皆さんと一緒にの会場に行きたかったのですが、緊急事態宣言が解除されておりませんので、府の境、県

の境を超えることができませんで、あと数日のことだったんですけども今日は実は自宅なんです。では始めたいと思います。先ほどご案内いただきました長谷山先生は、私の学生時代に同じ学科にいた先生でありまして、本当にこういうところで再会できてうれしゅうございます。題は人文知でパンデミックに対峙するという話にさせていただきました。感染症の歴史そのものについては勤め先の国際日本文化研究センター、日文研のサイトでこれから英語の字幕もつけて講演したものをYouTube上で公開していくことになっていますし、もうすでにリアルタイムではそういうことをしたものですから、今日はこの事態が起きてから人文知の研究者である私がどのように過ごしてきたか、この事態に対処してきたかということをお話したいと思います。

私は古文書学者なのにコロナウイルスが来てこの事態に関わることにするかどうかということに決断を迫られました、介入するかどうか。二つの理由がありまして、一つはある後悔がありました。私は地震津波の古文書なども若い時分から結構集めて興味はもってたんです。しかし東日本大震災に遭う前はまさかこんなふうになると思ってなかったから、私が例えば65歳で定年してからそういう本なんか書けばいいやと高を括っていたんですね。そうしたら震災がきまして、これはいかんというので歴史における津波や地震の歴史、あるいは土砂崩れや高潮だとかそういう関係の本を書いたり、こういう中公新書を書いたりですね、最近では子どもが歴史から地震や津波の危機に関しての話を知っていなければいけないので漫画にしまして、災害の日本史というのを出したりして、子どもに防災情報を、歴史に学ぶ防災情報というような活動をしています。

ところがもう一つの理由は、私は慶應義塾に行ったんです。あまり母校を褒めるのは自分のことを褒めるようで嫌なのですが、私とても好きなおところがあるんです、慶應義塾の。それは実用、実際役にたつ、実は人文知って実際に役に立たないことをやることの大切さでもあるんですけども、とはいえ、やっぱり実学なんですね。プラグマチックなんです。慶應義塾に入って福沢諭吉全集を読むんです。その中で非常に感動した言葉があって、いまだにこれは私の師匠、先ほど五百簾頭先生も紹介くださっている速水融もそう思っていたのではないかと思うんですけど、福沢諭吉の言葉に学者は国の奴雁なりという言葉があります。奴雁というのはちょっと難しい言葉なんですけど、要するに福沢さんは、これを現代語訳でしますと、群れた雁がみんな野原で餌をついばんでいるんですね、そのうち必ず1羽は首を上げて餌を食べずに四方の様子を窺って、不意の難に、要するに原典を見るとこれは人やキツネだと中国の古典には書いてありますが、襲ってこないようにご飯食わずに番をしている雁がいると言うんですね。それで学者もまたかくの如しというわけです。

前川レポートを昔書かれた前川さんも奴雁という言葉は重視していたという話も聞いていましたし、さらに聞いてみるとこう書いていますね、福沢諭吉さんは。天下の人、夢中になりて時勢と共に変遷する、要するにあくせく今の現状を追うしかない時に、今の在り方に警告を発して後日の得失を論じる。だから学者の議論というのは現在は効用が少ない場合もある、むしろ非難を受ける場合もある、何言ってるのとバカにされる場合もある。だけど

後日の利害に関わるのである。これ卓見だと思うんですね。一応言ってみる、遠くを見ている。私はあまり、これやってみたいんですけど、私もあまり気の利いた奴雁、雁ではないんですね。ただ目の前の餌をついばむよりは遠くを見ていたいというのは、やはりあるんですね。そうでしょう、きっと。だって何百年も昔の古文書をひたすら一日中読んでいて疲れも知らないというのが、やはり人文知の学者さん、そういうところがあると思いますし。子どもの頃から天体望遠鏡で遠くのものを見ていました。

先ほど福岡先生もすごくいいお話をしてくださいましたが、このコロナになってから福岡先生にメールを送ったんです。それは何かというと、京都の糺の森の中でルリボシカマキリという美しいカミキリムシを見つけたので、嬉しくて仕方がなくなって、福岡先生に、これはやはりルリボシカマキリでしょうか、なんてね。こういう美しいものとか遠いものに対して子どものように喜ぶというところはやはり学者はどこかありまして。ただそれだけではやはり世の中に申し訳ないという気持ちがあります。この福沢諭吉の奴雁の典拠は実はけっこう悲惨ですね。…今は検索するとすぐに見つかるんですけど、夜中洲の中に鴻（おとり）がいるわけです、それは内側で寝ているんだけど、雁は外に寝かされていて警戒にあたるんだと。これは中国の思想なので私は人文知をやっている以上、日本にこの思想はないかどう考えるんですね。

余計な話にそれですけど余計な話にそれるところが人文知の面白いところなんで。私、忍者の研究をしているんです。忍者に軒猿という言葉があるんです。なんだろう、忍者のこと、軒猿って。これ今月、僕、自分で発見したんです。甲州流兵法の代紳録という本にこう書いてあったんです。軒猿の字の解だと、軒猿というのは猿が柿あるいは栗を取ろうとする時に、友達を、猿仲間を家の軒の上に置いておいて物見をするというんです。で、畜生すらかくの如し、動物だってこんなことをするんだから、人間はしなきゃダメだろう、警戒を。これが奴雁と同じ発想ですよ。役に立たないかもしれませんが、不思議な笑い話かもしれませんが、こういう古文書の一字を1個ずつ大事にしながらいろんなことを追いかけていく中からいろんな知恵が出る、笑いも起きるとというのが実は人文知の面白いところで、意味なきものの中から意味を見いだす。それが楽しめるというのは、現生人類ホモサピエンスの非常に豊かなところだと私も思ってて。今日も少しづつ遊びをやっている、これ自宅なんでも後ろを何にしようかと思って、京都にいる以上は今お雛様の時期だから、立ち雛にしてみようとか、こういうことで楽しいと思えるというのがやはり非常に人文知のもっている、シンボリックなもので楽しめる我々の面白さなのです。

話がそれますのでコロナに戻して、こういうホモサピエンス現生人類というのは、1万年前ぐらいからヒト型コロナウイルスにやっぱり襲われていると言われていています。これに関しては、石弘之さんってたまたま私のおじさんだったんですけど、普段からこんな話をしておりました。やはり人類が襲われる危機というのは、例えば1万年に一回、南九州等で起きる破局噴火だとか、100年に1回は来そうな地震津波だとか、あるいは人間で防げる戦争だとかあるけれども、やはり頻度が高くて怖いのは感染症じゃないかと。石弘之さん、おじさ

んと普段こんなことを言っていて、弘之さんは事が起きる前から感染症の世界史という本を書かれて僕に送ってくれたんです。それで事態が起きてから私も。もう一つの理由があって、私がついた先生が速水融という先生でした。この先生は、磯田君、必ず来るよと言うんですよ。何が？変異ウイルスの襲来だと。これは耳底に残ってますね。文化勲章を取られたら隠居される方が多いんですけど、慶應義塾の横に部屋を借りまして、文化功労者の年金をそれに注ぎ込んで、スパニッシュインフルエンザの研究をするとおっしゃるんです。それで私はもう茨木大学に赴任が決まっていたので、100年前の新聞、当時は100年よりもっと短かったですけど、新聞をコピーしたやつを並べるのを手伝うしか手伝って差し上げられなかったんですけど、それでいろんな怖い話を先生から聞いていました。この事態になった時に言わなければいけないことがあるんじゃないかと思いました。

その一つが、これ事態が当初始まった時に、だいたい2月ぐらいまで私がびっくりしたのは、これが短期間で、例えば数週間とか数か月で収まるんじゃないかというような雰囲気ちょっと世の中にあった。だけど速水先生から私が聞いているスペインインフルエンザ、本に書かれている姿というのは、収束までに3、4年かかり、大きい波は2波、全部で小さいものも入れれば4波から5波、波状攻撃なわけです。で、私は、これはちょっと歴史で長い目で見て我々と普通とは見方が違うなと思って、ちょうどそこへ朝日新聞の取材が来たので次のように答えました。今から100年前のスペインインフルエンザは1%近くが日本人口では亡くなっていると。それとここに書きました、思ったより長く暴れるということを示しました。

それとこれから本当に広がってきた場合に、我々は移動の自由を制限されて、びっくりすると思ったので、移動と密集というのが非常に確実に死者を増やした原因だと速水先生はおっしゃっていたので、ここで移動の自由を一時我慢することがあるんだということを予め発信せねばということで、それを下のような記事に載せていただきました。あともう一つ、先ほどの五百簾頭先生のお話にも関わると言うんですけども、感染症を抑える方法はいくつもあるんですけども、今後の世界潮流にこれは大きな影響を与える可能性があるというのがやはり思えたので、二つのことを申しました。

権威主義的国家という言葉は敢えて私は避けたのですが、権威的態勢がやはり現れるわけですね、世界に。強く国民を強制することでうまく抑え込めたら正当化、自分たちの体制を正当化してくることがあるだろうと。一方、日本はそうはいかないから、民主国家の意識の高さで乗り切れないんだと。その前にこれもっと細かく書いておけばと今からすると反省なんですけど、奴隷としてはあまり優秀じゃないんですけど。政府にいろんな提言が行われる。その提言が重要であった。専門家の提言の重視ということ、専門家という言葉を入れてもうちょっと言っておけばよかったと私は今思っているんですけど。それで国民の知を政府へ取り込んで、それで事態を収束させるという方向をやらざるを得ないので、今から政府へ提言されることということは非常に重要なんだという風に申しました。ですからまとめれば、3月段階で印象より長引く。

あともう一つ繰り返し述べましたのが、これは笑い話になっちゃいますけど、噺家に、友人の落語家に私はメールしました。今から高座なしで暮らせる算段をしなきゃだめだと。そしたら後で落語家には感謝されました。先生の言った通りになりましたねと。それでいわゆる集団免疫戦略が危ないとも、そうですね、これは月刊文芸春秋の方に言いました。実は当初、いわゆる北欧、スウェーデンだっってこういうことを本当に、集団免疫はつきりとしたわけではありません。だけれど日本は高齢化社会ですし、コロナは風邪に多いように免疫が続く時間が違ってはしかのように一生もんにならないわけですね。ですから曖昧な前提、集団免疫を獲得するというようなものにのっとり戦略をとると、だいたい政策というのは曖昧な前提の上によってやったら危ないというのはもう歴史の教訓ですので、それを申しました。あまりこれを、上手にやらないと北欧諸国は非常にパブリックディプロマシーが上手ですから、ケチつけているような話になって困るかなと思ったんですが、とにかく日本では集団免疫はよそうという話を発信することにしました。

あとウイルスの変異ですね。変異を防ぐためには感染スピードの抑制が必要だと。スペイン風邪の場合は、死亡率が1.2、5.3、1.7ぐらいでこういうふうに移るわけですね。ですから3、4回波状的にやってきて、有効なワクチンがあるとか、幸運なウイルス変異がなければ、弱毒化というものがなければ、流行は数年間に及ぶ。今回はだいたいロードマップというのを私の中で予測しまして、永青文庫といって熊本藩細川家の文庫の評議員をやっているものですから、展示計画を立てないといけないから、だいたい1年ぐらいでワクチンの見通しがたって、1年半ぐらいで接種が始まるとの予測をたてて、春の段階で細川護熙さんとか幹部で共有するように情報発信をしたんですけども、これはちょっと未来のことですので、新聞の方では公にしませんでした。

あともう一つ、怖いなと思っているのが、ここに書いてますけど、波状的に来るので、一波が収まったところで非常に楽観するんですね。第二波は襲来するという、これも私も決断がいったんです。来ない前から来るなんていうことを言うと、やはり経済で被害を受ける人たちの気持ちもあると思うんですよ。昔、林子平という人が仙台藩のあっちの方に行って、襲来を言うとひどい目にあったことなんていうのも、要するに外国の危機というのを言ってひどい目にあったことなんかをきくと福沢先生は言ってたでしょうし、思ってたでしょうし、でもやっぱり来るものは来るので、来る前から第二波は襲来するとはつきり言うということにしました。それとあと続いて言ったのは過去の教訓ですね。表を出すまでもなく尾身茂会長の論文なんかにも載ってたんですけど、社会的制限をすると確かに死者は減らせるんです。だけれども、ここセントルイスのところを見ていただければわかるんですけども、緩めるんですよ。緩めるともう1回感染波がリバウンドでやってきて死者を逆に増やしてしまう。これでやっぱり教訓としては政治がやはり解除を急ぎすぎる場合がある。これは私の連載の読売新聞5月に、スペイン風邪の教訓の場合として、スペイン風邪は感染第一波が弱まった時に、教訓として政治家が危険を過小評価しがちだと、早く解除しちゃう、解除が早すぎると痛い目にあった歴史があるというふうに、「古今をちこち」という自分の

連載で訴えたりもしました。そういうことでこの連載をまとめて、感染症の日本史ができました。これ私はよく見てなかったんですけど、これを菅総理が赤坂の書店に行って、感染症の日本史をお買いになって年末の読書にしたという報道がありましたので、おそらく読んではくださったと思います。ただどういう影響を与えたのかは私もよくわかりませんが。つまり制限を加えた後の解除といったようなものを専門家の意見を聞きながら徐々に行っていくというようなことが、総理に届いておればいいなという風を感じております。

私は人文知の研究者なので、次にやり始めたのが患者の個人史の史料収集でした。京都の近所で私の知り合いのお寺に女学生の書いた日記があると。しかもその中にはスペイン風邪に本人もかかり、肉親が亡くなっていく姿が書かれている、徳正寺というお寺ですけども。その調査をやったり内容を紹介したりも行いました。おじいちゃんが亡くなったんですね、ほんとに。あと感染すると自分を責めたりするんですね、患者さんが。医学史というのはしばしば医者史になりやすい面があって、患者を主語にした歴史叙述というのは非常に大事だというのが私の考えでしたので、今回こういう新型のウイルスのかかった人たちがどのような状態になるのか、心理状態も含めて調べていくということにいたしました。

非常によく記録が残っているのが皇族方でして、秩父宮様はスペイン風邪にかかれて重症化されるんですよ。プライバシーとは言いながら秩父宮様は亡くなられた時に、自分の遺体も解剖してくれとのご遺言であられた方ですし、しっかりこの時の周囲のレントゲン技師の証言とかが出て、肺の状態などもわかるんです。・・・レントゲンで宮様の肺の状況を見るようになるのはとても思わなかったですね。ああいう本があると思って前には読んだことあったんですけど。コロナになると本当に資料の読み方もいろんな読み方になるもんだと思いました。治癒後も侍医は殿下のご身体は油断できる状態じゃないと。ご本人もどんなに頑張っても治療してくれても、俺に寿命がなければ治らないよというご発言があったと。これ見ますと重い後遺症なんです。新型のウイルスが若い方とは言いながら肺の中で暴れた場合には、非常に肺炎の跡形が大きい。危険性ということも非常に述べておかないといけない。若い人が自分は重症化しないからと言って動き回っても、病んだ後も後遺症が危ないということは歴史の示すところで、それはもう宮様が身をもっておそらく訴えたかったことだと僕も思っています。それと宮様が助かったのに、回復者の血清療法をとってるんです、治った患者の血を注射して治療する。おそらくこれが効いた可能性があるなど。やはり抗体の治療を行うということが見られる。

最後の方になってきたので、私のこれからやろうとしていることなんですけど、国際日本文化センターというのは、もちろん梅原猛先生がご尽力されてできた研究所なんですけど、先ほど来出ている文系と理系の枠組みを取っ払うとか、あと時代だとか学問分野をあまり問わずに広くいろんなことをする研究者でやるとか、あともう一つ国境の壁ですね、国境も超えているようなことをやるという研究所ですので、次年度4月から私は大阪大学の伊藤先生という薬学博士、薬剤師の先生と本草学の共同研究を始めるんですね。主に薬の祖と言われている柑橘類の江戸時代の現物標本が残っているようで、これを理系の人たちと科学分



析したりするという研究会でそのお世話をする事になりました。

ところが私が今非常に興味を持っているのは、例えば甘酒ですね。ここに出ていますね、甘酒売りが。これは守貞謾稿という資料に銭6文、今でいうとだいたい300円で売っているんですけど、疫病がはやるとけっこう甘酒を飲んだという記録がある。これが今やはり変異が早いウイルスなので、最後はコロナウイルスを抑制する物質の発見ということもやはり製薬の上では、薬を作る上でも重要になってくる。ファイバーラという物質に長崎大学が着目して、例えばマラリアやコロナは遺伝子配列にウイークポイントがあると言うんですね。G4構造と言ってグアニンが4回連続でGGGGと出てくるんです。そこに絡みつけるような物質を入れてやる。で、ファイバーラという、実は甘酒に一番よく入っている物質だそうです。だからこれは江戸時代の人々が疫病の時に僕はどうも甘酒、甘酒と言ってる感じを受けるんですね、資料見ると。ただの偶然かもしれません。だけどただ栄養があるから、飲む点滴と言われるからただ飲んでいるかもしれません。

こういう人文知が疫病の時に、経験的に何を飲んでいるかというような資料を追い求めていくことというのは、ひょっとすると薬を作っている研究者に何かのヒントを与えるのではないかなという思いをしています。人文知を求めて福沢諭吉先生の言う奴隷たりうるかなという風に一応もがきながらやってきた1年です。我々が現在を生き抜くための知恵を人文知はもたらしてくれていると信じております。以上で私の報告を終わりにさせていただきます。

長谷山；磯田さん、どうもありがとうございました。次にお話いただくのは山中由里子さんです。山中さんは東京大学大学院で学ばれた後、東京大学東洋文化研究所助手を経て、現在は国立民族学博物館教授でいらっしゃいます。ご専門は比較文学、比較文化で、これまでアレクサンドロス大王の死後に彼にまつわる様々な言説が、古代ギリシャ、ローマ世界からイスラム世界にどのように伝わり、そこでどのような展開を遂げたかを比較文学的観点から研究してこられました。中世イスラム世界におけるアレクサンドロス大王像の比較文学、比較文化研究をまとめたご著書『アレクサンドロス変相—古代から中世、イスラムへ—』が日本学士院学術奨励賞、日本学術振興会賞などを受賞されており、ほかにも編著『<驚異>の文化史—中東とヨーロッパを中心に—』『この世のキワ—自然の内と外』などを発表されています。現在の山中さんの研究テーマは、驚異と怪異の比較文化史、超常認識と自然観をめぐる比較心性史であり、2019年に山中さんが実行委員長を務めた国立民族学博物館での特別展、驚異と怪異、想像界の生き物たちが生態系と人間の想像力と表象物の相関関係をより広い人類史的な視点からとらえた展示として大きな反響を呼びました。本日は自然界と想像界のあわいに漂うものという題名でお話をいただきます。それでは関西会場の山中さん、よろしくお祈りします。

「自然界と想像界のあわいに漂うもの」 山中由里子（人間文化研究機構国立民族学博物館）

教授)

山中です。長谷山先生、ありがとうございます。私が研究しているのは、近代合理主義がありえないものと見なして、科学的に存在が証明できないものとして否定してきた、こういった想像界のクリーチャーたち、ファンタスティックビーストとかモンスターですとか、幻獣、怪物、妖怪、いろんな呼び名がありますが、こうした想像界のクリーチャーたちというのは科学によって否定されてきたものですが、しかし 20 世紀後半以降科学技術自体があり得ないものをあり得るものにしてきました。人間の知性は機械の知能と融合し、自然を解析、模倣し超越しようとしています。想像界の産物とされていた合成獣、いろんな動物のパーツを組み合わせたコンポジットアニマルですとか、あるいは神の領域とされていた生命操作が人間の手によって現実のものとなりつつあります。何が自然で何が自然でないのか、何が現実で何が仮想なのか、自然界と想像界のあわい、狭間に漂う生き物たちは自然の中で人間の立ち位置を映し出す鏡でもあります。

先ほど長谷山先生にご紹介いただきましたように私はこういう本を出してきて、アレクサンドロスに関わる中世、イスラム世界の伝承から驚異譚、marvels、wonders ですね、アラブペルシャ語圏の驚異譚の研究をしてきて、この本について説明しますと後半時間が無くなるので、これは買ってくださいということでもちょっと宣伝させていただきました。一神教世界の驚異と東アジアの怪異というものを比較したくなってきました。2015 年に立ち上げたのが共同研究の驚異と怪異、想像界の比較研究というものでして、驚異と怪異というのは共に既知の世界の彼方にある不価値なものを知ろうとする人間の営みが生み出したものであり、記録すべき不思議なこと、稀なことという意味で対置されるべき概念という共通理解のもとに共同研究を進めてきました。

アレクサンドロスに関する研究というのは個人戦だとすると、驚異と怪異は団体戦でして、いろいろな方の専門性を総合して、テーマを開拓していくというのも研究の現場です。様々なこうしたいろいろな助成金のお金で特に学術振興会にはいろいろとお世話になったのですが、こうした研究が進めてこられたのですが、一番最近の成果がこの左側に出ています、この世のキワ、自然の内と外、勉強出版からアジア遊学というシリーズから出しましたが。この驚異と怪異の表象をユーラシア大陸の東西の伝承資料、民族資料、美術品に探って、自然と超自然の境界領域、この世とあの世の心理的物理的距離感、それから境界に立ち現れる体、音、ものなどについて、総勢 25 名の豪華執筆陣の方々が執筆してくださっております。この共同研究を進めることによって疑問に出てきた点は、超自然という言葉が無批判に使うことについて疑問が出てきました。人間はその常軌を逸脱する不可思議な物事の出現の辻褄を合わせるために、何等かの見えない力の介在を見いだしてきたことは確かです。近代以前の一神教の世界では、それは神 God であり、東アジアでは天ですとか、気ですとか、神、日本で言うとカタカナで書くところのカミですね、であったんですが、これらの存在をおしなべて超自然という言葉でこれまで研究上括られてきたんですが、そういっ

た言葉で括られることに驚異と怪異の文化史の共同研究を進めるにしたがって非常にみんなで違和感を感じるようになりました。

自然という言葉自体が近代以前の日本語においても、これは磯田さんの方が詳しいですが、じねんと読んだり、おのずからしかると読んだり。つまり作為的ではない、ありのままという意味であって、英語の natural と同じ意味であって、nature という意味ではありませんでした。nature としての自然というのは近代化以降に定着した概念であって、従って超自然 super natural も西洋近代的な概念なのではないかということで、もうちょっときっちりと東アジア的なもの、イスラム世界的なもの、ヨーロッパ的な思想観というのを比較しようじゃないかということで共同研究を進めて、これはたぶん画面でもあまり見えないと思うので、本をぜひ買ってくださいという年表なのですが、この驚異と怪異の比較文化史として作った一つの試みがこの比較年表です。紀元前 400 年ぐらいから現代までかなり大風呂敷なタイムラインをカバーしているんですが、地域をヨーロッパと西アジアと東アジアのユーラシアの 3 つの文化圏に分けて、重要な歴史的イベントと関連するジャンルの書物ですとか、人物をあげました。なので、ここも細かくて見えないとは思いますが、山海経（せんがいきょう）というのが中国のこのところに入っていたり、ヨーロッパだったらマルコポーロの旅行のことが入っていたりといった、そういった比較年表です。

こういったことを驚異と怪異の比較文化史でやってきたのですが、この大風呂敷、私の大風呂敷の癖はここではまだまだ序の口でして、さらに 7 万年前に前頭前野が発達して創造的想像力、creative imagination というものを人類が獲得したというのは進化心理学ですとか、認知考古学の研究についても学び始めまして、人文知から人類知へと一気にまた視野が広がってしまいました。これは科研の新学術領域研究という大きなプロジェクトのジャンルがありまして、そのパレオアジア文化史学というのに、考古学系のプロジェクトなんですけど、それに 5 年ほど分担者として関わらせていただくことによって、人類史的に見て、人はなぜモンスターを想像するのかという根源的な問いにたどりつきました。人は直感的な理解から逸脱する曖昧で不整合な現象に対して驚きや怪しみを感じて、その混乱した心理状態を何とか解消するために、理解不能、制御不能な現象の原因に、霊ですとか、神ですとか、天などの非物質的で超越的な存在を想定する精神メカニズムを備えました。そしてそのような見えない力をなんとか自分の都合のよいようにコントロールするために、見えないものに名前をつけ、可視化、その絵姿を書いたり彫ったり、そして因果性を説明しようとしてきたのではないかということがわかってきました。

なぜ人はモンスターを想像するのかというのはなかなか答えることが難しい問いではありますが、その次には、人はどのようにモンスターを想像してきたかという問いにたどりつきました。これがそのスライドでして、人間は直接には感知できない存在の姿を想像するには、すでに知っている既知のイメージを、部品を使いまわして、組み合わせるしか可視化することができないようです。その表象のプロセスにはレヴィ・ストロースという人類学者が言ったところのブリコラージュ、寄せ集めという意味ですが、ブリコラージュの思考が見て

とれます。その最も古い例とされているのが右側にいますライオンマンと通称呼ばれている 4 万年ほど前の怪物合成獣ですね、をかたどったものであり、これはホモサピエンスの脳の働き方を示す証拠とされます。このライオンマンからモンスターたちの表象のされ方がどれだけ変化したかということを知りたいという長い視野で考えてみますと、描くツールですとか素材というのは、技術的な進化は著しくあったものの、イメージの構成のされ方というのは実はあまり変わっていないのではないかと見えてきます。

つまりこの 4 万年前のライオンマンが、画面上で鑑賞しているこの絵は五十嵐大介さんという日本の漫画家さんが 2019 年の民博でやりました特別展「驚異と怪異－想像界の生き物たち」のために書き下ろして下さった異類の行進、異類のマーチという作品です。五十嵐さんは海獣の子どもですとかウムヴェルトといった幻獣をモチーフにした素敵な作品を描かれておられる漫画家ですが、このライオンマンと現代の彼の幻獣表象を並べてみても、多様化しているように見えていながら実は組み合わせり方のパターンは限られているのではないかと見えてきました。あまりに突拍子もない、例えば鼻からタコの足が出ているみたいなそういった組み合わせ方というのは実は脳はしないんだといったことが見えてきました。

想像界の過去、現在、未来についての考察を展覧会の形で社会還元したのが、民博で 2019 年秋に開催した特別展「驚異と怪異－想像界の生き物たち」です。博物館という三つ目の現場ですね、個人研究から共同研究、そして民博の場合ですと博物館。人文機構で言いますと歴博も博物館という媒体を持っていますが、民博も博物館という現場を持っています。共同研究を進めながら、博物館という空間に研究をどう落とし込もうかというところ 10 年ほど画策しました。その結果が特別展だったんですが、この特別展は 2 部構成になっていて、第 1 部が想像界の生物相、biota of the imaginary としまして、地球上の動物界、植物界、鉱物界に見いだされた素材をブリコラージュした多様な合成生物を並べました。2 階部分を占めた第 2 部は想像界の変相としまして、聞く、見る、知る、作るというセクションに未知なる世界の驚異や常ならざる怪異がどのように認識され、知識体系に整理され、創作のインスピレーションになってきたかを探りました。驚異や怪異が近代的理性の発展とともに科学的に証明できない未確認生物や超常現象として、自然の体系から排除され、ファンタジーやオカルトの域に閉じ込められていくという近代の歴史的展開もこの部分で示しました。

第 1 部ではこの想像界の生態系を水、天、地というセクションにゾーニングして想像界の生き物たちをかたどった世界中の彫像ですとか仮面ですとか意匠ですとか祭礼道具などを展示しました。そのことによって人間の想像的行為、イマジナティブな行為と自然環境の相関関係を俯瞰しようと試みました。しかし、例えば水のセクションにいる人魚たちは、例えば魚やアザラシなど水に生きるヒレ動物と地上に生きる人間が組み合わせられた合成獣です。あるいは中国や日本の龍は水、天、地すべてにまたがる崇高なる存在です。つまり想像界の生き物たちの多くはこの境界領域に属する狭間の不思議なクリーチャーたちなのです。概念上はこのようなベン図で境界性は説明できるのですが、展示空間でそれをどう落とし込むか、それが大きな問題でした。これは空間のデザインのプロにまかせるしかありません。

今回この特展の空間デザインにしてくださったのは京都の建築家の若林広幸さんという方でこの特別展示館の空間を驚異と怪異の迷路のように見事に仕立てていただきました。空間の魔術師とも言える方なのですが、展示台の幅や高さの規則性で、柱廊のような柱が立っている廊下のようなリズム感と統一感を出しつつも、正面の大階段に対して通路の角度を45度にずらして平衡感覚に揺さぶりをかけてきました。かつセクションを壁面で区切ってしまうのではなくて、あるセクションの展示物の後ろに隣のセクションが重なって見えるような配置にして、かつ導線も正にヨーロッパの宮廷庭園に作られたようなラビリンスのように行きつ戻りつして、あえて少し迷っても楽しいというものにしてくださいました。

ただお客さんの中には一筆書きで回らないと気持ち悪いという方も実際おられまして、そういう方のためにあそこの通路のところにクリーチャーの足跡のシールを貼って、順路をこうやって回ったら行きつ戻りつしないで見れるよというヒントも仕掛けました。これは鳥瞰図ならぬ龍瞰図で、素敵な写真なのでここに突っ込みました。このように空間に落とし込まれた世界中の聖獣、怪獣、幻獣を見て改めて気づきました。そうか、liminal, not linearなのかと。この分類不能なクリーチャーたちは線引きできない、一直線上でも表せない。この境界性にこそ超越的なパワーが見いだされてきたのだと。実物を並べて情感に働きかけてくるその迫力を感じて初めてわかることがあります。なので民博というのはそういったことが実験ができる非常に素晴らしい研究所であると思うのです。

こうして何が見えてきたか、どういうものがモンスターとして描かれているのか。先ほども言いましたが、反直感的なもの、こんなものはないはずだ、あり得ないはずだというものの正体を知りたい。描いたり名付けたり説明することによって手なずける。それで何が描かれてきたかという、遠くにいて見えないものですか、体の中にいて見えないもの、これは針の書ですね、針間書（はりききがき）という有名な、体の中のいろんな虫を描いた面白い本です。人間の感情とか抑制のきかない行動を起こすものもモンスターとして描かれてきました。自然現象や天変地異を起こすもの、ある意味想定外と言われるものを想定するための表象。あとは自然の中で見つけた不思議な形や物にモンスターを見いだしてきました。

さらに今度はそういったモンスターのイメージというのはどうして反復されるのか、なぜ伝承されやすいのか、直接の影響関係が証明できないところにも似たような表象があるのはなぜなのか。例えば人魚の図像というのはどうしてこれだけ広がっているのかというようにも考えてみたのですが、これは宗教の認知科学的な基盤を説明したパスカル・ポアイエという人の理論によりますと、特定の宗教的表象が伝承され続ける認知的最適条件というのは想像力を刺激して注意を喚起する反直感的、ここでは彼は超自然的という言葉を使っていますが、そういった反直感的な要素と推定可能度と把握可能度の高い、直感的で自然的な要素がバランスよく結合している場合に、そういったイメージが伝わりやすいと言っています。

つまり人魚というのはこういったバランスがとてもよくて、注意をひきやすい、かつ記憶に残りやすいモチーフなのかもしれません。この人魚の図像というのも本当に古くから作

られていまして、最古の人魚はもしかしたら期限前 6300 年から 5500 年頃に作られたと言われていますセルビアのレキンスキ・ヴィルという遺跡、水の精あたりかと思うのですが、もしかしたら私は考古学の専門でないのもっと古いのあるぞというのがあるかもしれません。あとこのシリアの紀元前 10 世紀のテルハラフの魚人などはもうほとんど現在の人魚像と変わらないような形になっています。

ここで無理やりコロナネタに結びつけますが、人魚と言えばコロナ感染症と共に大流行したアマビエも人魚のようなものです。拡散の原典は今スライドに出しています京都大学附属図書館が所蔵する肥後国海中の怪というものが描かれている刷り物なのですが、弘化 3 年、1846 年に出たということがこの言葉書きには書かれているんですが、実際にこれが流通したのがその年であるとは限らないと思います。後の時代のものである可能性もあって、この辺は磯田先生のご意見を伺いたいところです。この言葉書きによると肥後の国、熊本県の海に光るものが毎夜出るといので、役人が確かめに行ったところ、アマビエと名乗る怪物が現れて、当年より 6 年の間は豊作が続くが病気が流行るので自分の姿を写して見せるようにと言ってまた海の中に消えていったということが書かれています。突然現れて作物の豊作や疫病の流行などの未来を予言してまた消え去るとい、アマビエはいわゆる予言獣、予言をする獣、予言獣の一種です。予言獣というのは妖怪研究の方々がつけた概念用語ですが、こうした予言獣を描いた絵図というのは、江戸時代後期から庶民の間で悪病除けのお守りとして人気がありました。人魚のような姿の神社姫あるいはヒメウオとも呼ばれたりしますが、ヒメウオとか、人の顔に牛の体のクダンですとか、猿の頭に足が 3 本ついたアマビコなどの異形の幻獣を描いた絵図は赤痢やコレラといった流行病の感染拡大の度に厄除けのご利益のあるものとして売り歩いたたかな者が現れ拡散しました。

またこの予言獣の絵姿の流布は異形の生き物のミイラや作り物の見世物の流行と時期が重なります。こうした珍獣、幻獣の見世物は神仏の御開帳のようなご利益があるありがたいものとして客を集めて、見世物小屋に入る際の木戸銭と引き換えにこうした絵姿が引き札として配られていたようです。疫病退散祈願に用いられた過去の予言獣たちの中でもアマビエはこの 1 枚しか残っていないんです。実はアマビコ、さっきの猿の頭に足が 3 本のアマビコというのは何枚もあるんですが、アマビコの変異種というか亜種ではないかと妖怪研究者の中では言われているんですが、この 1 例だけが現存していたアマビエが、今なぜ突然増殖し、社会現象にまでなったのか。

これも妖怪研究者の方々の中では諸説いろいろ飛び交っておりますが、私は文理融合の一つの思考実験としまして、ダン・スペルベルの表象の疫学モデルというのに当てはめて考察してみたいと思います。ちなみに去年の秋に兵庫県立歴史博物館で開催されました驚異と怪異の巡回展でこのアマビエがなんと展示されておりました。借用はコロナ流行以前から決まっていたもので、この巡回展の内容を企画した姫路の博物館の学芸課長さんの香川正信さんの正に予言的キュレーションという、そのおかげでちょうど本当にもうアマビエ大大大ブームになっていた時に姫路で展示されていました。スペルベルに戻りますが、スペ

ルベルはフランスの人類学者、認知科学者で表象は感染する、文化への自然主義的アプローチの著者であります。スペルベルは病理学のアプローチを文化研究に当てはめまして、広い地域に伝わって長期間にわたって維持されてきた文化的事象の感染力に注目しています。アマビエが強烈な感染力を持って短時間に広がった様子は正にウイルスの感染拡大と呼応してしまっていて、スペルベルの表象の疫学、epidemiology of representation のアプローチをあてはめて検証するのにももしかしたら格好の事例かとも思ひまして、今回まだ試験的思考実験の段階ですが、それを残りの時間で発表させてもらいます。

私は病理学の専門ではないんですが、感染症の三角形という、こういうものがあるというのを見つけまして、これは植物病理学者のジョージ・マックニューという人が、病原体、宿主、環境の相関関係を概念化した図です。もしかしたらだいぶこれは outdated、古い病理学の考え方なのかもしれないのですが、文化に当てはめるという意味でこれぐらい抽象化されている方が思考の実験がしやすいのでこれを応用してみました。これをアマビエの表象の拡散にあてはめるとどうなるか。マックニューが言っていたのは感染に有利な環境と宿主の感受性と病原体の感染力が重なったところで病が起こる、そういうことを言っておりますそれを概念化した図です。アマビエが近世に、江戸時代に流行したアマビコの変異種と見なされているということは前述いたしました、現存するサンプルが一つしか残っていないということから、過去に発生した当初は表象としてほとんど感染力、伝播力がなくて、そのまま休眠状態で潜伏していたようなウイルスのようなものだと思います。それが短時間の間に突如活性化し増殖したのは、こういった図のような条件がそろったからではないかと思ひます。

まず環境ですが、アマビエの感染に有利な環境というのはどういうものだったかと言うと、この新型コロナウイルスという実際の感染症のまん延が生み出した不安、閉塞感、鬱屈というような社会的心理的状況がアマビエの拡散の背景にあることは言うまでもないと思ひますが、話題になり始めた2月末、3月前半当初の状況をもう少し細かく振り返ってみますと、このアマビエ画の初発症例、Patient zero が誰であったか、何であったかと言ひますと、妖怪画の掛軸を製作しているイラストレーターの大蛇堂（おろちどう）さんという人がおられまして、その大蛇堂さんがアマビエをモチーフにした掛軸を書かれまして、それをツイートしたのがちょうど2月27日、安倍前総理大臣が全国の小中学校に臨時休校要請を出したちょうどその日です。

彼の描いたアマビエは波間のビーナス風なちょっとセクシーな半魚人みたいな、そういう掛軸を書かれたんですが、それが妖怪好きの間で話題となりまして、あっという間に SNS のアマビエチャレンジとして様々なアマビエモチーフの創作物が増殖しました。3月半ばの段階では日本における新型コロナウイルス感染症の国内事例のほとんどはダイヤモンドプリンセスというクルーズ船上での発症者が占める一方で、イタリアやスペインなどでの爆発的な感染拡大が報道されました。感染拡大地域からチャーター便で帰国した日本人の中にも陽性者が含まれて、3月21日には水際対策の強化によって入国制限や検疫処置の運用

が開始されました。つまりアマビエが登場した感染拡大初期の段階では新型コロナウイルスは水際の脅威として日本の一般市民に認識されていたという点を強調したいです。正に海からやってきた恐ろしい疫病と波間にのんきに漂うアマビエの気の抜けた表情のギャップが不安緩和の効果があり、それがアマビエ拡散の一因になったのではないかと報告者は考えます。

2番目の病原体ですが、ではその表象の伝播を運んだエージェント、伝播媒体、感染ルートは何であったか。常光徹先生という元歴博の先生によりますと、江戸期の予言獣の絵図の流布には絵図のご利益で安心を手に入れようとする人々の心理を利用して一儲けしようとする仕掛け人のような人々がいたと言います。それは町中や豪農の家々を絵図をもって売りさばっていく下級神職の人ですとか、見世物の興行師ですとか、そういう人たちだったと思うのですが、これに比べて2020年のアマビエ流行の場合は、まず伝播媒体が紙ですとか口伝の噂話ではなくてネット空間であったという点は言うまでもなく大きな違いだと思います。ものとしての商品化の動きというのはSNS上の流行を後追いする形で出てきたもので、当初の#アマビエチャレンジはむしろ遊びの要素が強く、投稿者が金銭的な利益を得ようとして参加するものではなかったと思われまふ。しかし、いいね！ですとか、リツイート、フォロワーの増加といった数値化された共感というのはネット空間においては評価経済的な価値を持つものであり、それがおそらく拡散のインセンティブになったのではないかと思います。ウイルスのライフサイクルという点で言いますと、アマビエは視覚的な表象に自分の姿を写して人々に見せると疫病退散の効能があるという遺伝的情報を伴っています。つまり宿主に自らの複製物を作らせるという巧みなDNAを内蔵した、そういった表象物です。しかも複製の度に変異を遂げるといふ、そういったものでした。

3番目の宿主ですが、初期の宿主はモンスター好きの作家、クリエイティブなネット利用者で彼らがさらにいろいろな変異種を生み出しました。このステージの宿主のアマビエ表象に対する感受性、許容性というのは遊びの精神や創造性とリンクしていたように思われます。数か月後には収束するであろうというような楽観的な見通しもあって、こういったパロディを楽しむ余裕があったのかもしれない。しかし4月に入って緊急事態宣言が発出されますと、今度は厚生労働省の啓発アイコンにまでなっていくまふ。長期化することがわかってくるに従って宿主の心理状態も変化し、寺社、お寺さんや神社ですとか行政が疑似護符的な意味合いでアマビエ表象を複製し、一般市民がそれを収集したり消費したりするという行動が4月、5月には見られるようになってきました。アマビエチャレンジという創造的なアマビエ製作というのに人々は飽きてくるんです、免疫がついてくるんですが、コロナ収束祈願的なアマビエ表象とゆるキャラ商品としてのアマビエというのが主流株として入れ替わってきます。これは私が姫路の護国神社で集めたアマビエのお札と京都の下京区が出しているアマビエ短冊で、なんと詐欺にまで効くというオールマイティーなものになっています。これは私が夏に消費しましたアマビエビールと、これは私のつたないアマビエの一句で私のつたないアマビエチャレンジです。



この変異のタイムラインを感染拡大のチャートに重ねてみますと、集団心理の変化とともにアマビエ表象が変異した様子がわかります。ストレス発散の遊びから祈願的消費にあって、そこから当初のブームは下火になっていきますが、疑似護符的な機能というのがまだまだ続いているのではないかなという、そういった動きが見えてくると同時に、このアマビエ表象拡散の動きとともに今専門家の動き。ちょっと小さくて見えないかもしれませんが、専門家の解説が伴うという点においてもメディアにおけるコロナ報道の在り方と通じる場所があって面白いかと思います。3月当初にはもう preliminary analysis が妖怪研究者の中でネット上のポータルに出てきて、4月19日には日曜美術館が取り上げて、contextualization、文脈化していくんですね。10月になると紙媒体の雑誌に retrospective な analysis が出てきて、その間いろいろ標本集めの運動みたいなものも本ですとか、展覧会の形で出てきます。

先史時代のライオンマンからアマビエまでモンスター表象は恐怖の視覚化であり、人類にとって一つの防御手段であったのではないのでしょうか。すなわち神ですとか精霊などの存在を想定し、人知を超えたその力を可視化し、それを祀る儀礼や伝承を集団で維持するという行為は環境の不確実性や危険に対する不安や恐怖を創造的シミュレーションによって緩和するための一種の環境マネジメントの営みと捉えることができ、そうした行為に関わる表象物というのはそのツールと見なすことができるのではないのでしょうか。21世紀の人類の危機に際して蘇ったモンスターは、決して迷信、妄説、単なるファンタジーではなく、人間が自らの立ち位置を謙虚に受け止めるための人類知なのだと思います。ご清聴ありがとうございました。

長谷山；山中さん、どうもありがとうございました。いま私の頭の中では山中さんのお顔が大変愛嬌のあるアマビエに見えていて、COVID-19が収まるといいなと感じています。歴史は繰り返さないと申しますけれども、しかし歴史という時間軸の中で、人類が感染症とどのように関わってきたかということを追ってみますと、磯田さんの言われた我々が現在を生きるために事実を見つけるだけではなくて、経験則が得られるかを考えながら過去の資料を見ることが大切であるという言葉が生きてきますし、また山中さんが以前書かれていた自然との繋がりや人間同士の関係が希薄になってしまった世界での生きづらさ、また行動をおかしていくテクノロジーに支配される不安がますます高まっている今、自然と超自然の狭間にいる境界のクリーチャーたちへの恐れや敬いは単なる迷信やファンタジーではなく、人間が生き残るための知となりうるかもしれないということが実感できます。

科学は事実を説明するのに対して、人文学は事実を理解するというふうに対比されたり、あるいは人間性を根本に据え、人間とその文化を総合的に探究するのが人文学であると言われます。新型コロナウイルスの感染拡大によって世の中にはデマや中傷が溢れましたけれども、他方でSNSを通じて、アスリートやアーティスト、多くの市民

が希望や癒しを与える動画を発信したりして、分断、孤立した人々がテクノロジーの活用によって再びつながりを回復するということもできました。テクノロジーか人間か、科学か人文学かという二項対立ではなくて、このコロナ禍の中で人間性を回復するために、またこれまでの知識が役に立たない予想外の事態に遭遇したときに、批判的思考によって事態の本質を理解し、創造性を発揮して突破口を見いだしていく総合的な力こそが人文知と言えます。磯田さん、山中さんのお話を伺って、人間文化研究の現場における深い専門性を備えた個別研究の土台があつてこそ、初めて人類が最悪を克服していく総合的な英知を獲得することができるということを感じました。磯田さん、山中さん、どうもありがとうございました。

## 閉会の挨拶

挨拶 近藤誠一（人文知応援大会実行委員長・人文知応援フォーラム共同代表・元文化庁長官）

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました本大会の実行委員長近藤誠一でございます。本日は人文知応援フォーラムの第1回大会、コロナという最悪に立ち向かう人文知に多数ご参加を賜り、また最後までご清聴いただきまして誠にありがとうございました。そしてこの機会に格調高い基調講演をしていただきました佐々木毅先生、深く広い貴重な意見表明をしていただきました五百簾頭先生と福岡伸一先生、そしてただいま人間文化研究の現場からということで大変興味ある話をいただきました磯田道史先生と山中由里子先生。そして司会、コーディネーターをお務めいただきました高階秀爾先生、榊原定征名誉会長、そして長谷山彰塾長に心より御礼を申し上げます。

本大会の趣旨はパンフレットにもございますように、人類社会が今直面する大変革の複雑性、深刻性と緊急性が新型コロナウイルス感染の世界的拡大によってあぶり出され、不安と戸惑いが世界を覆う中で、我々が明るい未来を積極的に構築していく、そして次の世代に伝えていく、そういう活動をしていく上で極めて重要な羅針盤となるのが人文知である。そしてその人文知について語り合うこと、それによって社会に人文知が広まり、深まっていくこと、そのことの重要性を訴えるための大会でございます。人文知とは何か、なぜ重要なのかにつきましては、本日の5人のご登壇者と3人のコーディネーターのお話に見事に表現されていたと思います。

5人の先生方、そして3人のコーディネーターの方々のコメントに共通しておりますのは、この複雑で相互に絡み合っ、途方もなく難しそうな問題に立ち向かうためには、何と言っても目の前の事象にとらわれず、人間とはそもそも何なのか、そして人間がその一部である、自然の生態系というのはどのようなメカニズムで動いているのか、そういったことについての知見が必要だということでございます。それを与えてくれるのは、先人が言語とか芸術表現で残してくれた素晴らしい英知、それを連ねている歴史から学ぶということ、時間

軸という言葉が何回か出ましたが、それが必要であること。そしてまた特定の分野を超えた専門知識を深めつつ、それに加えてそれを超えた人文知、文理を超えた知恵、そういったものが必要であるということ、5人の先生方、そして3人のコーディネーターの方々が等しく強調されておられたと思います。

佐々木先生におかれましては、現在我々の目の前に迫っております反グローバリズムの流れ、格差の拡大あるいは自由か統制かという大きな問題、そういったものを考えるにあたって、20世紀初頭の歴史をもう一度振り返ってみることの重要性、歴史から先人の知恵を学ぶことの重要性を伺いました。それが今後を見据えていく人文知の出番であるというような趣旨のことをおっしゃっていただきました。また五百簾頭先生からもリベラルデモクラシーという、おそらく人間が考えつくベストな統治システム、富の形成システム、それが今かなりの危機に瀕しておりますが、それも短絡的に中国が感染拡大に成功したとか、そういう目先の事象にとらわれることなく、歴史を振り返りそもそも人間にはどういう長所があり欠点があるのか、独裁がいいのか、それともそれを乗り越えた自由を、統治能力を高めることによって確保していくことが大事なのか、そういったことをしっかりと考えなければいけないということを教えていただけたと思います。

福岡先生からは、科学、サイエンスの研究をやっていく上でも、単にその分野の専門性を深める、知見を深めるだけではなくて、科学史から学びそしてまた累積された人間の知恵、人文学から得られる知恵、そういった総合的な人文知というものがある。人間は科学というものを自分自身がどういうものであるかということがわかる。ともすると理工系の方々が陥りがちな機械論的な分析からそれを超えて、先生の動的平衡論にみられるように、方丈記にももう大昔から、おそらくサイエンスが発達していない時期からいろんな方々が感じてきたこと、そういったことを学ぶことによって機械論的な分析に偏りすぎることを防ぐことができる。そういった貴重なお話を伺うことができたと思います。情報だけが問題ではない、これからAI、情報の処理が得意なAIがどんどん我々の日常生活に入ってくると思います。しかしAIが得意とする情報処理、検索、計算だけでは人間のことはわからないということを教えていただいたように思います。

時間も限られておりますので、磯田先生、山中先生の内容は大変面白くて話し出せばキリがないのですが、大変面白かった。そして特に生物学、医学、心理学、芸術、そういったことを総合的に扱うことの有意さ、面白さ、そういったことを教えていただいたような気がいたします。

新型コロナウイルスの感染拡大防止のためにこの大会を予定通り行うべきか、部内でさんざん議論をいたしました。しかし今のような時こそ十分な感染対策をとりつつ、人文知という羅針盤の重要性を訴える好機であるという認識で実施に踏み切った次第でございます。オンラインによる講演の実施、あるいは大会時間の全体的な短縮、ご参加いただいた方々からのご質問を受けられないこと、あるいは登壇者相互の間のインタラクションといたしましうか、討議の時間もとれなかったという種々の制約にも拘わりませず、そして大会の運営

もハウリングとか若干の問題があったかもしれませんが、そういった状況にも拘わりませず、ご登壇いただいた方々からの素晴らしいご講演によって、所期の成果を収めることができたとうれしく思っております。この難しいオペレーションを円滑に実行していただいた、まずは総合司会の草野満代さん、そして人間文化研究機構を中心とする事務局の皆様方、この場を借りて厚く御礼を申し上げたいと思います。

今日テーマとなりました人文知の力、これは我々フォーラムのメンバーだけで活用されるものではございません。ご参加いただいた皆様方の力を総合して、そしてこれからの未来を担う若い世代の方々の中に、この人文知に対する認識がより深まり、広がり、そして行動に移されていくということをご心から願っております。それが人類を適切な明るい未来に導いていく上で大変重要なことではないかと思っております。本大会はそのキックオフという位置づけであるとお考えいただければと思います。次回以降まだ日程等は決まっておりません。これから取り上げたいテーマもたくさんございます。今回短縮のためにあきらめざるを得なかった、例えばビジネス界の役割あるいは教育界の役割、芸術界の役割、あるいはテクノロジーの重要性、それをどうやって使いこなすか、いろいろな角度からこの人文知の問題を今後取り扱っていきたいと思っております。

皆様方、今日ご参加いただいたたくさんの方々、これからの力をぜひ、そしてまたイニシアチブ、今後どうしていったらいいのか、どうしたらこの重要な人文知のことを社会に広めていけるかについてのご示唆をいただければと思っております。そのような思いを込めて簡単な大会宣言を準備いたしました。ただ今から読み上げますのでご賛同いただけることを願っております。

#### 「大会宣言」採択

それでは全体短いので読み上げさせていただきます。

「コロナ禍は人間や社会の営みが生み出す様々な歪みをあぶり出しました。私たちは豊かな人間性を軸とするより良い未来をデザインするため、人間の共感力や創造力をいっそう磨く源泉となる人文知を広め、活かす努力をすることを宣言します。」

これが 100 字ちょっとですけれども大会宣言の本体でございます。お時間が許せば次の解説的な文章、第一回人文知応援大会、大会宣言に寄せてについても読み上げさせていただきます。こうと思いましたが、これは時間の関係もでございます。ちょっと早口になるかもしれません。読み上げさせていただきます。

「世界は今、山積する困難な課題に直面している。この混迷の時代、より良い未来を築き上げるためには個別分野の専門知識を超えたすべての学問、文化、芸術が歴史的に育んできた知と感性の総体としての人文知を羅針盤とすることが必要である。私たちはそう信じて人文知応援フォーラムを結成し、第一回人文知応援大会を開催した。

前世紀後半から顕在化し始めていた文明のマネジメントの負の側面が自然の生態系への負荷増大と世界規模の格差拡大や社会の分裂を生み、近年世界各地で価値観の揺らぎと社

会の混乱を引き起こしてきた。日本でも、世界でも、未来への不安と閉塞感が広がっている。

そこに襲来したコロナ禍は人類社会が内に秘めていた深刻な亀裂をあぶり出し、世界の構造とそこに生きる各個人の日々の生活に大きな影を落としている。

いま私たちが直面する課題は深く重い。その課題に挑む知恵と力の源泉が人文知である。人文知は世界の人々が多彩な文化と生活があることを互いに理解し、尊重しあう基盤を作る。人文知は日本が国の姿を整え、世界の中で確固たる立ち位置を築く力となる。人文知はあらゆる活動の中に世界レベルの創造力と挑戦力を育てる知恵となる。人文知は一人一人の生活が豊かで思いやりのあるものであるよう後押しする。

私たちは知的誠実さをもって、新しい時代を作る知恵と力の源泉である人文知を社会に広く浸透させ、人類社会発展の歪みを正していくことが、これからの日本の最優先課題であることを確信して、ここに第一回人文知応援大会宣言を発表する。」

以上が解説の文章でございます。ただ今の大会宣言、ご同意いただける方は zoom の機能で手をあげるというのがございます。そのクリックをしていただくことをお願いいたします。はい、ありがとうございます。視聴者からの皆様、もちろん登壇者の方々からも手が挙がっております。たくさんの方から手が挙がるが確認できました。従いまして先ほど読み上げました大会宣言、今後の大会として採択をさせていただきます。大変長い時間ご参加いただき、ご協力をいただき、誠にありがとうございました。心から御礼を申し上げます。

以上